①

入学試験過去問題

国語

【試験時間６０分】

この過去問題は、本校のオープンキャンパスに参加した方や本校の教職員が直接対応させて戴いた方のみに配布しているものであり、郵送等での配布は一切しておりません。
許可なく複製（コピー）をとることを固く禁じます。

学校法人穴吹学園

問題一　次の文章は立花隆「シベリア鎮魂歌――香月泰男の世界」より「私のシベリア」（一九七〇年）の中から　**雲・別**　の一節である。解説を参考に読んで、後の問いに答えよ。

解説　この作品は、著者が一九六九年の夏、十日間ばかりかけて「シベリアシリーズ」で知られる画家香月泰男にインタビューしたことをメモ書きし、後で文章に書き起こす形で発表したものである。香月泰男は上京するまで祖父母に育てられていた。次の文章は著者が香月泰男に替わって一人称で書いた文章になっている。

雲・別

確かに私はひねくれた子供だった。素直でなかった。甘えるとか、頼みごとをするとかが極度にいやだった。自分が愛されていることへの確信がなかったからかもしれない。父も母も生きているというのに、自分の手のとどくところにはいなかった。両親が死んで独りぼっちというのなら、かえってもっと素直になれたかもしれない。いつも自分が見棄てられた存在であるという意識がついてまわっていたのだ。私の救いになっていたのは、ただ絵を描くことだけだった。[1]

小学校四年の時に、師範学校を出た絵の好きな先生がフニン①してきた。油絵の道具を持っていて、休みの日など、景色のよい所にでかけて行っては、イーゼルを立てて写生していた。私はよくそれについていっては、あきもせず眺めていた。別に絵がうまいわけではなかった。技量に関するかぎり、生意気のようだが、私は子供心にもバカにしていた。しかし、油絵であるということがなんとも魅力だった。家に帰って、水彩絵の具で描いた絵をとりだしてみると、いかにも薄っぺらなものに見えて仕方なかった。それに、油絵の具の匂いがなんともいえなかった。家に帰って夜寝る時まで匂いの記憶があった。あの匂いをいつもかいでいられるためだけにでも、油絵の具が欲しいと思ったくらいだった。

結局、私が油絵の具を手に入れることができたのは、中学四年のときである。それを手に入れるあらゆる手段を考えたあげく、ついに一大決心をして、[2] 母の再婚先に手紙を書いたのである。

それは母に書いたはじめての手紙だった。幼いときの母の記憶が残っているにはいた。しかし私にとって、母はとうに現実的な存在であることをやめていた。母が生きてさほど遠くない所に住んでいることは知っていたが、それをついぞ肉体を持った生身の存在として考えてみることはなかった。母はいつも淡い記憶の中にだけ住んでいる観念的な存在だった。

手紙を書こうとして、ひどくとまどった。なにを語ろうにも、語るべきことはなにも見出せなかった。私と母の間には、血がつながっている以外に、共通の世界などまるでなかったのだ。

「拝啓、ご無沙汰しております・・・」

誰が宛先でもいいような、まるっきり形式的なことを書いた。後は直截に、どうしても油絵の具が欲しいから買ってくれということをズバリ書いた。読み返してみると何年も会わずにいる子が母に書く手紙にしては、あまりに露骨②に物欲しげな内容で、いささか気恥しい思いがしないでもなかった。

母にしても、ほったらかしにしてしまった我が子に対して、後めたい気持ちがあったのだろう。ほどなくして、豪華な油絵の道具を一そろい送ってきた。手紙も添えられてあったが、そんなものはそっちのけで、私は包みを開いて出てくる道具の一つ一つをなでさすり、眺めまわし、いつまでもあきなかった。

そのころには、私はもうはっきりと絵描きになる決心をつけていた。どう考えても、他に進むべき道はなかったのである。

中学は長門市にある現在の大津高校である。私はその一期生ということになる。同期は六十人もいたろうか。絵だけは誰にも負けないつもりだったが、あとは完全な劣等生だった。学校が嫌いだった。もし絵がなかったら、本当に学校をやめていたかもしれない。

だから、私の美術学校へ進学したいという希望も、それほど抵抗なく受け入れてもらえた。しかし、美術学校も決して簡単に入れたわけではなかった。私が狙ったのは、試験が実技だけの本科である。実技なら、絶対の自信があるつもりだったが、はじめの年の試験ではアッサリ振られてしまった。やはり井③の中の蛙だったのである。結局私は、入試に二度すべって、三度目にようやく合格した。その間の二年間、東京に下宿して川端画学校に

デッサンの勉強に通った。美術学校に入っても一年目は石膏③デッサンばかり、二年目は人体デッサンばかりだった。本当の絵の勉強は自分一人でやらなければならなかった。

私の絵の傾向はどんどん変わっていった。美術学校に入るまでは、ブ[注1]ラマンクが好きだった。A彼の激しく叫びたてるようなブルーの使い方に憬れた。やがて、彼のブルーよりも、ゴ[注2]ッホのプルシアン・ブルーにより強くひきつけられていった。明るく、しかしあくまで冷たく、見るものをいつしか狂気の淵にさそいこまずにはおかないような、Bあの深い静かな青が私をとらえたのだ。

次いでゴッホは私を浮世絵の世界に導いていった。いわば、ヨーロッパ近代絵画の流れを逆にたどることによって、日本にカイキ④してきたのだ。浮世絵では特に広[注3]重が好きだった。浮世絵から宗[注4]達に、宗達から南画の石[注5]濤にと、私はいよいよ東洋画の世界に深入りしていった。4芸術とは自分を発見していく過程であると思う。私が洋画を志しながら東洋画に傾倒していったのも、東洋人である自分の発見、5日本人である自分の発見の故だろうと思う。

方法として私は油絵を選んだ。しかし、ヨーロッパ絵画を単に皮相のものとしてだけでなく根底からとらえようと試みたとき、私はそこにあまりにも大きな伝統の重みを見て、6絶望せざるをえなかった。日本に生まれ育った私に、西洋的な油絵を描けるわけがないことを知らされたのである。

日本人にとって、いかなる油絵を描くことが可能であるか。というのがそのころから私の絵描きとしての生命をかけて追求し続けた命題である。

結局、一言で言ってしまえば、私が発見したことは、日本の絵画の伝統の中でしか仕事をできないという単純なことだった。言い換えれば、油絵の具で東洋画の持つ精神を追求していくということになろうか。

確かに東洋画には我々の血に共鳴する何かがある。いくら洋画に見慣れても、そこにはどこか違和感がただよってくるのを避けえないのとは逆に、つまらないと思う東洋画でも、どこか安らぎを感じさせるところがある。この二つを融合させたいというのが私の願いだった。

東洋画と西洋画のちがいの一つは、余白にあると思う。東洋画に独特の余白の存在は、

カッチリ描きこまれた西洋画のバックとはちがって、なんとも融通無碍⑤なものである。西洋画のバックには一つの解釈しかないが、東洋画の余白は見る人次第で、どうにでもなる。

余白の問題一つとってみても、口でいうのは簡単だが、現実に画面の上でそれを油絵の具を使ってどう処理するかということになると、はなはだ難しい。油絵の具を用いての余白にならなければならない。「描かれた余白」なんて、それ自体自己矛盾である。ここに一つの大きな壁がある。私にはまだそれが完全に乗り越えられたとは思わない。しかし、私の方向が間違っているとも思わない。

今さら東洋画の伝統でもあるまいという考え方もあるだろう。だがやはり私は芸術とは伝統の上に立つものであるという考え方を捨てない。いかにゼンエイテキ⑥なものと見えても、それが真の芸術であるかぎり、伝統の中から生まれているはずだ。現代芸術として現象しているものは、氷山の海面上に現れた部分のようなものだ。海面上に現れた部分は、実はその数千倍、数万倍のものに海中で支えられているのである。[7] 海中に支える部分を持たない氷は流氷にすぎない。

明治以降の日本の洋画家の多くがやろうとしたことは、見かけがよい氷山を見つけて、[8] そこに飛び移り、上の方を少しハンマーで削り取ろうとしたようなものだ。

私は自分のはじめに立っていた氷山を見直すことからはじめて、意外なことを発見していった。西洋画と東洋画という、現象面からだけ見れば、いかにも隔絶している観のあるものが、その底部では非常に接近している、いや、ほとんど一体であるとさえいえるということである。

東洋画に傾倒していったといっても、西洋画の勉強を怠っていたわけではない。ただ、猫の眼のように変わる流行を追うのはいやだったので、私の興味の中心は、西洋画でも古典、特に絵画の本格的な発生期である中世からルネサンス初期に移っていった。そこで発見したのは、ロマネスク、ゴシックの中世絵画、中世彫刻（レリーフ）であり、初期ルネサンスの画家たちだった。ここにあるものは、まさしく東洋画の伝統の中に私が発見したものと同じだった。

[9] それを発見したとき、私はなんとなし胸のモヤモヤがふっ切れたような、明るい気持ちになった。東は東、西は西といっても、やはり同じ人間である以上、共通の理解の原点に

なるようなものがある。それが見つかったように思えたのである。東洋画と西洋画の融合という私の一見無謀な願望も、そこに見つけられたような気がした。

注1ブラマンク＝（1876～1958）フランスの画家、野獣派に分類
注2ゴッホ＝（1853～1890）オランダの画家、ポスト印象派
注3広重＝（1797～1858）歌川広重、江戸時代の浮世絵師、代表作「東海道五十三次」
注4宗達＝江戸時代初期の画家、俵屋宗達、代表作「風神雷神図屏風」
注5石濤＝（1642～1707）中国清、文人画

問一　傍線①から⑥までのカタカナを漢字で書き、漢字はその読みをカタカナで書け。

問二　傍線1「私の救いになっていたのは、ただ絵を描くことだけだった。」と同じ意味を表している一文をこれより後の文から抜き出し、始めの七字を書け。

問三　傍線2「ついに一大決心をして」とあるが、なぜ一大決心だったのか。その理由に当てはまるものを次の中から三つ選び、その記号を書け。

ア　母は現実的な存在ではなく、観念的な存在だったから。
イ　母親はいないと思い込んでいたから。
ウ　誰であれ頼みごとをするのはとても嫌だったから。
エ　育ててくれている祖父母に悪いと思ったから。
オ　人間不信に陥っていたから。
カ　自分は見棄てられた存在だと思っていたから。

問四　傍線3「井の中の蛙」と同じような意味を表すことわざに「鍵の穴から天を覗く」があるように、次の①から④のことわざと同じような意味を表すことわざを語群から選び、それぞれその記号を書け。

①　他山の石　　②　内助の功　　③　一刻千金　　④　群鶏の鶴

（語群）

ア　縁の下の力持ち　　イ　対岸の火事　　ウ　砂に黄金泥に蓮
エ　渡りに舟　　オ　花に嵐　　カ　ひとの振り見て我が振り直せ
キ　時は金なり

問五　傍線４「芸術とは自分を発見していく過程であると思う。」とあるが、傍線Ａ「彼の激しく叫びたてるようなブルーの使い方に憬れた。」からＢ「あの深い静かな青が私をとらえたのだ。」への過程にはどういう自分の発見があったのか。次の中から最も適当なものを選び、その記号を書け。

ア　Ａは若く未熟な自分の才能を持て余して、ただ感情的な激しさを求めているという発見で、Ｂは自分の才能の本質を見極めようと深く考えていく狂気に近づくような自分の発見であった。

イ　Ａはほとばしる才能を持て余し気味に激しい感情をぶつけるように描いている自分の発見で、Ｂは自分の才能を冷静に見つめるだけの余裕も生まれ今後の絵画の方向を深く考えている自分の発見であった。

ウ　Ａは若い時はどうしても激情がほとばしる画家に魅了され真似ようとする自分の発見で、Ｂは年齢を重ね周囲の状況も見え始め、内面からの必然性にかられて描こうとする自分の発見であった。

エ　Ａは青年期の抑えようのないエネルギーが外に向かってあふれ出るような激情を抱え込んだ自分の発見で、Ｂは静かに内省的な人間の本質の深いところで苦悩する自分の発見であった。

問六　傍線５「日本人である自分の発見の故だろうと思う。」とあるが、「日本人である自分の発見」の契機となったのは何か。一語（一単語）で書け。

問七　傍線６「絶望せざるをえなかった。」とあるが、絶望から立ち直り、将来の目標としたことは何か。二十五字以内で抜き出し、前後三字を書け。

問八　傍線７「海中で支えられているのである。」とあるが、何が支えているのか。一語（一単語）で書け。

問九　傍線８「見かけがよい氷山を見つけて、そこに飛び移り、上の方を少しハンマーで

削り取ろうとしたようなものだ。」という比喩を説明した次の中から最も適当なものを選び、その記号を書け。

ア　気に入った描き方の技術を真似るだけで、それまで積み重ねられた歴史や文化を無視し、外見だけは西洋画に似せた絵を描いていること

イ　いかにも西洋画らしく目立つ技巧を上手に使って、その技巧に到達した困難を理解しようともせずうまくごまかした絵を描いていること

ウ　日本にはない西洋画の画法を学んでそれらしい西洋画を描いても、薄っぺらな表面的な美しか生まない絵しか描けないこと

エ　気に入った西洋画を見つけ、真似て描こうとしたのはいいが、その画法のもつ深い思索には思い至らず外見だけを繕っていること

問十　傍線９「それを発見したとき、私はなんとなし胸のモヤモヤがふっ切れたような、明るい気持ちになった。」とあるが、私は最終的には何を発見したのか。全文を参考にして説明した次の中から最も適当なものを選び、その記号を書け。

ア　日本の絵画の伝統の中でしか絵を描くことはできないと思い込んでいたが、西洋画の歴史をたどると、東洋画も西洋画も人間の普遍的な生き方を描くことで一体となっているのを発見した。また今まで思い悩んでいた「余白」の描き方の違いも融合できることを発見した。

イ　東洋画への共鳴と西洋画への違和感からくる疑問について、二つを融合させたいとの思いから具体的に「余白」の問題を考えていくと、伝統の違いにあることを発見した。またその違いを乗り越えるには本質的な人間の共通点を理解することが重要だということも発見した。

ウ　東洋画と西洋画は地理・歴史が異なる世界に属し、絵の特徴の差異は大きいが、本質的な人間の生き方を貫くものは変わらず両世界の伝統は一体であることを発見した。また東洋画と西洋画の融合点を見つけ、絵を描くことの楽しさを再発見した。

エ　日本の洋画家が真似ようとした西洋画の世界にも伝統があり、東洋画の伝統と根底では一体化していることを発見した。またそこでは大いに異なるようにみえる東洋画と西洋画の伝統を融合させることにより、新しい絵画の世界が開かれることを発見し

た。

問題二　次の文章は、中島京子「亡霊たち」の一部分である。読んで後の問に答えよ。

いつごろからだったか、おじいちゃんは見えない人を見るようになった。

独りでいて退屈すると、脚が悪いのに出かけたがるようになって、どうしたのかと聞くと、

「リョウユーが来ている」と言う。

「リョウユー？」

首を捻るひ孫の反応に、もどかしさ[1]をいっぱいにして、左手を振り回して「行くんだ、行くんだ」と言い張るので、千夏は何度か外出の支度[①]をさせて外へ連れ出したりした。

多くの場合、支度している間におじいちゃんは、外出の目的を忘れてしまった。つまり、リョウユーに会わなかった。けれども、おじいちゃんが出かけなくたって、あちらからやってきた。

古くなって座面のボコボコしてきた籐椅子に座布団を載せて、静かに腰掛けているのが最晩年のおじいちゃんの日常生活だった。籐椅子は南側の窓の近くに置かれていて、そこからは栗の木のある小さな庭が見える。たいていの場合、リョウユーは庭から訪ねてくるようだった。おじいちゃんはしばらくそのリョウユーと交流した後で、大きく手を伸ばしてそれを折り、額に爪を当てるようにして敬礼した。それは、リョウユーが帰っていくときの合図だった。終わると、ふうとため息をついて、籐椅子の上でこくりこくりと居眠りを始める。

母に初めてリョウユーの話をしたのは、千夏が高一の夏だっただろうか。

「おじいちゃんね、今日、リョウユーと会ってた」

「リョウユー？」

「おじいちゃんが、そう言った」

それを聞くと母は少し妙な顔をした。

「誰か来たの？」

「来ない。おじいちゃんが、そう言っただけ」

いっしょに夕食を摂っていた父が、
「おじいちゃんは、戦争には行ったの？」
とたずねた。
「行ったよ。行ったはず。たしか。でも、ほとんど、その話はしたことがないって、おばあちゃんは言ってたけどね」
「リョウユーじゃなくて、センユーじゃないの？」
と、父は言った。
「センユー？」
「戦争に行ってたときの、戦地の仲間ってこと」
「ああ、戦友」
そうかなあと母は首を傾げた。おじいちゃんの戦争について、母はほとんど知らなかった。「インドネシアだったか、マレーシアだったか、よく覚えてない」ところへ送られたらしいと、母は言った。
「マラリアにかかって、九死に一生だったって言ってた。そういえば、法事のときの親戚が会うと必ず『ヒトーで九死に一生』って言ってて、意味がよくわからなかったんだけど、大人になってから、秘密の島ってことだとわかってね」
ご飯を食べながら、母が言うと、父が横から、
「それ、ヒトウだろ」
と、あきれたような口調で言った。
「うん、そうなの。音だけ聞くと秘密の温泉みたいね。でも、島のことなの。秘島」
「だからさ、秘密の島じゃなくて、比島だよ。ガ島じゃなくて」
「ガトー？」
「比島はフィリピンだよ。ガ島がガダルカナル」
「そうなの？」
母と娘はユニゾンで驚きを表明した。
「そうだよ。比島はフィリピンだよ。びっくりするなあ、もう。何が『大人になってからわかった』だよ。ぜんぜん、わかってないじゃん」

父は母をさんざんからかったが、結局「リョウユー」が戦友のことなのかどうかは、よくわからなかった。おじいちゃんが行った戦地がフィリピンだったにしても、そのことは家族にほとんど共有されていない個人史で、千夏の母がかろうじて覚えているのは、終戦の年の冬に帰国したという事実だった。

5

最初に気づいたのは、いつごろだっただろうか。

昼食を摂ると、寝室で横になるのを習慣にしていたおじいちゃんが、ときどきショウソウ②に駆られたように起きてきて、

「リョウユーが来ている」

と言うのだった。

「ここんところ、ずーっとね。二階に来てるんだよ。」

「二階に？ 二階で何してるの？」

おじいちゃんは、人目をはばかるように周囲を見回したのちに、ひ孫娘にそっと囁く。

「おれはね、話し合いじゃないかと思ってる」

「なんの？」

「うん、会議だ」

おじいちゃんは神妙な面持ちで言った。あのときは、二階に複数来ていたらしい。

そうかと思うとなんだか妙に（　A　）、ひどく丁寧な口調になっていることもあった。

「そりゃ、おそらく奥さんには届かなかったでしょうね」

と、おじいちゃんは唐突に言い出した。（　B　）周囲を見回してみても、そばには千夏しかいなかった。

「そんなことを、いつまで思っていたって始まらない。長いことはないんだから、いっしょです。」

慰めるような口調で、おじいちゃんは誰かに話しかけていた。

「気になさらんことです。もう終わったことなんだから」

「おじいちゃん、どうしたの？なにを気にしなくてもいいの？」

少し（　C　）、横から千夏が話しかけると、はじかれたように振り返って、おじいちゃんは言う。

「おまえ、こんなところで何をしているんだ」
「何って、おじいちゃんのお世話だよ」
「そんなものはいらない。世話なんかいらないよ」
「そう？それならいいけど、誰か来てたの？」
「うん？それはあれだ。リョウユーが来てたんだがな」
そう言うと、おじいちゃんは少し困ったように顔をしかめた。
大事なものがなくなってしまったと、悲しげに探していたこともある。
「あいつがもって行ったんだ」
さんざんあちこち千夏に探し回らせたあとで、おじいちゃんはそう言うと頭を掻いた。

仙太郎おじいちゃんは九十一歳で亡くなった。死因は心不全とシンダン③され、周りの誰もが大往生④だと言った。家族と親戚だけのこぢんまりした葬儀が出され、お骨は四十九日に、千春の祖母や曾祖母の眠る霊園のお墓に納められた。
「妻も娘もいるんだから、寂しくないね」
と、母が言った。妻も娘もいない世界で時折訪ねてくるリョウユーと交信しながら生きるよりもいいくらいだというようなことを父も言った。
それはもしかしたらそうかもしれないけれど、わたしは寂しいよ、と千夏は言った。
千夏がおじいちゃんの死をなかなか受け入れられなくてぼんやりしていたころに、父が、大岡昇平の『レイテ戦記』を貸してくれた。
読んでみるよ、と言って借りたものの、どこの部隊がどこに配属されてどんな戦いがあって何人死んだという詳細が書かれたその本は、千夏にはあまりおもしろいと思えなかった。
戦記は退屈だったので、近所の図書館で見つけた「ミンドロ島ふたたび」というエッセイ集のようなものと「靴の話」という短篇集を借りた。「ミンドロ島ふたたび」のはじめのほうには、昭和三十三年の一月に遺骨収集船「銀河丸」が出港したと書いてあった。戦後、厚生省引揚援護局がはじめて出す船だったという。
仕事があって「銀河丸」に乗ることができなかった著者が、書きつけたという「詩のようなもの」に千夏は目を止めた。そこにはこんなふうに書いてあった。

なさけないことは、ほかにもたくさんあるんです。
誰も僕の気持を察してくれない。
なさけない気持で、僕はやっぱり生きている。
わかって貰えるのは、みんなだけなんだと、こん日この時わかったんだ。
しかしみんなは今は土の中、藪の中で、バラバラの、
骨にすぎない。骨には耳はないから
聞えはしないし、よし聞えたって、
口がないから、「わかったよ」と
いってもらうわけにも行かない。
しかしとにかく今夜この場で、机の前に坐り、
大粒の涙をぽたぽたこぼし、みんなに聞いて貰いたい、[6]・・・・・・・・・・

おじいちゃんが、南の島から訪ねてくるリョウユーに会っていたのかどうか、ほんとうのとこは謎だけれど、千夏はそうだったのではないかと想像するようになった。おじいちゃんは「誰も僕の気持を察してくれない」と思って、「なさけない気持」で、「やっぱり生きてい」たのだろうか。「わかって貰えるのは、みんなだけなんだ」と、「みんなに聞いて貰いたい」と思って生きていただろうか。そうして、みんなは、おじいちゃんの晩年になってようやっと訪ねてきてくれたんだろうか。

たとえば、おじいちゃんが失くしてしまって、あんなに大騒ぎして探していたのは、「靴の話」に出てくるような靴だったのではないか、とか。

その短篇には、駐屯[7]中の部隊で靴の盗難が頻繁に起こったという話が書いてあった。兵士たちはひどく歩きにくい鮫皮のゴム底靴というのを支給されて、それを履きつぶしてフィリピンの山中を彷徨[8]している。中には、敵の攻撃を受けて兵舎を捨てることになったときに倉庫から奪った新品の予備の靴を持っている者たちがいて、その予備靴がしょっちゅう盗まれるというのだった。「私」は、死んでいく兵士の枕元から一揃いの予備靴を盗む。死んだ人からだから貰うとか譲り受けるとも言えるけれども、生前にジョウト⑤の約束があ

ったわけではなくて、置いておけばほかの人のものになるに決まっているから取って自分のものにする。その瞬間から、「私」の靴が盗難対象になる。そんな話だった。予備靴を持っていたのに死んでしまった男がかかった病気はマラリアで、それは仙太郎おじいちゃんがフィリピンで罹患⑥したものと同じだったから、千夏にはこの話とおじいちゃんを結びつけやすかった。

「あいつが持って行った」のは、靴だったに違いないような気がしてきた。

ひどく丁寧な口調で、「奥さんには届かなかった」とかなんとか、誰かを慰めていたのも、手紙だとか小包みたいなものを、千夏は想像した。それは同じ短篇集に入っていた「出征」という一篇に、兵士に支給された飴玉やキャラメルや羊羹を、東京で別れてきた奥さんや子どもになんとかして送ろうとする話が書いてあったからだ。

そんなことばかり考えていたせいか、千夏には、あるときからおじいちゃんのリョウユーが見えるようになった。

それは「靴の話」の表紙に描いてあったような、カーキ色の軍服を着て背中に水筒をつるし、銃を横向きに持っている兵士の姿だ。たとえば、夏のとても暑い日に、ペットボトルの水を飲んでいる千夏の横なんかに、その人はあらわれる。おそらくは「捉まるまで」という一篇に出てくる、喉の渇きの話が印象的だったせいだ。隣で立っている兵士は、もしかしたら、若い日のおじいちゃんかもしれないと思って、

「飲む？」

と、ボトルを差し出すといなくなってしまう。

「死んでる人同士なら、あの世で再会してるはずじゃないの。気持ち悪いこと言わないで」

「気持ち悪いかなあ」

「気持ち悪いわよ」

おじいちゃんが生きているうちに、もっと話を聞いておけばよかったと思うものの、あの状態の人に聞ける話など限られている。

母に止められるまでもなく、母が言うところの「亡霊」は、「健全な二十一世紀の高校生」の生活から次第に遠ざかっていった。それは、おじいちゃんを思い出すことが少なくなることを意味してはいたけれども、彼がひ孫の胸からいなくなってしまったわけではない。

今年の四月から大学生になった千夏は、いまもときどき、ぼんやりとおじいちゃんのことを考えている。

もうすぐ、おじいちゃんの三回忌があるというので、母は重い腰を上げておじいちゃんの部屋の抜本的な整理をすることになり、千夏も手伝うことになった。

折り畳みの将棋盤を広げようとすると、一枚の便箋が舞って床に落ちた。脳梗塞で動きにくくなった利き腕の右手で書いたのか、それとも動く左手で書いたのか。いつごろ書いたのか。将棋盤を広げていたころというなら、死ぬよりはずっと前のことだろうか。

ずいぶん震えていたけれども、それはまさしく仙太郎おじいちゃんの字だった。ちょっと意味が取れない気もしたが、千夏は大事にとっておくことにした。

便箋には鉛筆でこんなふうに書いてあった。

――自分が死んだら、僚友に足をやってください

問一　傍線①から⑥までのカタカナを漢字で書き、漢字はその読みをカタカナで書け。

問二　傍線1「もどかしさ」の説明として適切なものを一つ、次の中から選んで記号で書け。

ア　脚が悪くてリョウユーのところに行けないもどかしさ。

イ　自分が見ているものが孫の千夏に見えないもどかしさ。

ウ　大切なことを千夏に分かってもらえないもどかしさ。

エ　懐かしいリョウユーとうまく話せないもどかしさ。

問三　傍線2「ほとんど、その話はしたことがない」とあるが、それによって戦争のことはおじいちゃんにとってどういうものになったのか。解答欄の空欄に文中の語句を二十字以内で書き抜き、文章を完成させよ。

問四　傍線3「意味がよくわからなかった」とあるが、ヒトーは母の頭の中でどのような漢字をあてはめられていったのか。空欄ＡＢに適切な漢字を書け。

A（　　）みたい？　→　B（　　）　→　比島

問五　傍線４「比島はフィリピンだよ」とあるが、「比」は江戸時代以来日本で使用されたフィリピンを意味する漢字の当て字である。同様の次の漢字はどこの国を意味するか。国名をカタカナで書け。

（1）仏　　（2）蘭

問六　傍線５「最初に気づいた」とあるが、何に気づいたのか。それより前の文中から二十字程度で抜き出して「こと」に続くように書け。

問七　空欄Ａ～Ｃに次の中から適切な語句を補充し、その記号を書け。

ア　驚いて
イ　笑って
ウ　薄気味が悪い気がして
エ　しみじみとして

問八　傍線６「大粒の涙をぽたぽたこぼし、みんなに聞いて貰いたい、」とあるが、聞いてもらいたいこととして適切なものを次の中から一つ選んで記号で書け。

ア　厳しい戦争を体験したことで抱き続けている思い
イ　誰にも自分の気持ちがわかってもらえないやりきれなさ
ウ　友が死んで自分だけが生き残ったうしろめたさ
エ　死んだ友が「わかった」と言ってくれない孤独

問九　傍線７「駐屯」、傍線８「彷徨」の意味として適切なものを、選択肢の中からそれぞれ選んでその記号を書け。

7駐屯
ア　軍隊がある地に留まること
イ　軍隊で進撃をすること

ウ　軍隊が各地を巡り歩くこと
エ　軍隊で人が出入りすること

8彷徨

ア　秩序なくありあちこちへ行くこと
イ　邪魔者として追い払われること
ウ　いろいろなところへ次々と逃げること
エ　目当てもなく歩き回ること

問十　傍線9「千夏は大事にとっておくことにした」とあるが、千夏の気持ちの説明として適切なものを二つ記号で選べ。

ア　高齢である祖父の死を当然のこととして淡々と受け入れた両親と違って、まだ若い千夏は内面では祖父の死を受け止められず混乱したまま祖父の思い出をたどっている。
イ　少し気持ちが落ち着いた今、便箋の言葉は家族からじゃけんにされていたおじいちゃんが自分の思いをただ一人の味方であった千夏に託したものであると感じている。
ウ　戦争を生き残った人が死んだ友だちに語りかける詩を読んで、祖父が戦争で死んだ友達に会いたがっていたのに生前にわかってあげられなかったことを後悔している。
エ　戦争の本を読んで、出征した人々がどのような体験をしたのかを具体的に知ったことで、祖父が震える手で懸命に手紙を書いたつらい心情がわかる気がしている。
オ　便箋の中の僚友という言葉は、これまで家族の中で謎だったおじいちゃんの言葉の意味をはっきりと示しており、おじいちゃんの思いを表す貴重なものだと感じている。

問題三　次の意味を表す語句を後から選び、その記号を書け。

①　人が抜け出た後の寝床や住居などのたとえ
②　得意になっている
③　直接に取り扱われる
④　かげで他人から非難される
⑤　他人に遠慮せずに堂々と行動する

⑥ 生気や活気のある気配
⑦ 見て見ぬふり
⑧ 後に心が残って、先へ進むことができない状態
⑨ 落ち着いてめったなことには驚かない
⑩ ちらっと聞く

ア 目をつぶる　イ 大手を振る　ウ 後ろ指を指される
エ 手塩にかける　オ 目にあまる　カ 手にかかる
キ 後ろ髪をひかれる　ク 飛ぶ鳥跡を濁さず　ケ いぶき
コ もぬけの殻　サ 肝が据わる　シ 鼻が高い
ス 馬の耳に念仏　セ 泣きっ面に蜂　ソ 小耳にはさむ

問題四　次の（　　）に当てはまる適当な語を選び、その記号を書け。

① 外部からの口出しを一切認めない（ア 閉　イ 連　ウ 封）鎖的な組織は風通しが悪い。
② 守る者は誰もなく（ア 亡　イ 形　ウ 残）骸化している規則を手直しする。
③ たとえ取り組みが（ア 苦　イ 徒　ウ 過）労に終わろうとも無駄にはしない。
④ 比（ア 例　イ 較　ウ 喩）を用いてわかりやすくたとえて説明した。
⑤ 好き嫌いで判断せずに（ア 倫　イ 心　ウ 合）理的に損得を計算して行動する。
⑥ 心の栄養となる様々な体験を経て人間の（ア 由　イ 一　ウ 情）緒は培われていく。
⑦ 海峡を隔てて隣り合う両国の軍事力には（ア 圧倒　イ 抜本　ウ 抜群）的な差がある。
⑧ 日本の場合、近代化はすなわち西洋化として（ア 現　イ 表　ウ 印）象される。
⑨ 治安が悪化して夜になるとならず者が跳（ア 躍　イ 梁　ウ 舞）するよう

になった。

⑩ 文明に汚されることのない真に無（ア　我　イ　常　ウ　垢　）な大自然など架空のものだ。

入学試験過去問題①　解答用紙

受験番号

氏名

得点

問題一

問一
①
⑤
⑥
②
③
④

問二

問三

問四
①
②
③
④

問五

問六

問七
↓

問八

問九

問十

問題二

問一
①
⑤
⑥
②
③
④

問二

問三
戦争のことは
になった

問四
A
B

問五
(1)
(2)

問六
こと

問七
A
B
C

問八

問九
駐屯
彷徨

問十

問題三

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩

問題四

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩

入学試験過去問題　模範解答①

問題一

問一
① 赴任
② ロコツ
③ セッコウ
④ 回帰
⑤ ユウズウムゲ
⑥ 前衛的

問二
もし絵がなかった

問三
アウカ（順不同）

問四
① カ
② ア
③ キ
④ ウ

問五
エ

問六
浮世絵

問七
油絵の↓うこと

問八
伝統

問九
ア

問十
ウ

問題二

問一
① シタク
② 焦燥
③ 診断
④ ダイオウジョウ
⑤ 譲渡
⑥ リカン

問二
ウ

問三
戦争のことは家族にほとんど共有されていない個人史になった

問四
A 秘湯
B 秘島
（完答）

問五
(1) フランス
(2) オランダ

問六
おじいちゃんは見えないこと
人を見るようになった

問七
A エ
B ア
C ウ

問八
ア

問九
駐屯 ア
彷徨 エ

問十
エ
オ

問題三

① コ
② シ
③ カ
④ ウ
⑤ イ
⑥ ケ
⑦ ア
⑧ キ
⑨ サ
⑩ ソ

問題四

① ア
② イ
③ イ
④ ウ
⑤ ウ
⑥ ウ
⑦ ア
⑧ イ
⑨ イ
⑩ ウ

この模範解答は、本校のオープンキャンパスに参加した方や本校の教職員が直接対応させて戴いた方のみに配布しているものであり、郵送等での配布は一切しておりません。
許可なく複製（コピー）をとることを固く禁じます。

②

入学試験過去問題

国語

【試験時間６０分】

この過去問題は、本校のオープンキャンパスに参加した方や本校の教職員が直接対応させて戴いた方のみに配布しているものであり、郵送等での配布は一切しておりません。許可なく複製（コピー）をとることを固く禁じます。

学校法人 穴吹学園

問題一　次の文章は、杉田俊介「ドラえもん論」の一部分（途中省略がある）である。読んで後の問いに答えよ。

いくつかの大学の非常勤の授業で、「弱いと言えばまずはじめに誰のことを思い出しますか」というアンケートを取ってみたことがあります。　映画や小説、マンガやアニメ、テレビドラマやアイドルなど、なんでも構いません、あなたがいちばん弱いと思うひとは誰ですか、と。

一番多かったのは誰だったでしょうか？――皆さんご想像のとおり、それは、のび太です。のび太はたしかに、テストの点数が悪い。運動神経もよくありません。顔もいまいち。弱虫で、なまけもので、同じような失敗を何度もくりかえします。ジャイアンやスネ夫にバカにされ、いじめられている。弱さのかたまりのような人間にみえます。

学生さんたちは、次のようなことを言っていました。のび太が弱いのは、必ずしも勉強や運動ができないからではないし、ケンカが弱いためでもない。のび太の弱さとは、精神や意志の弱さのことなのです、と。たしかにのび太は、すぐに目の前の困難から逃げたり、なまけたり、他人に頼ったりしてしまいます。

つまり、のび太の本質的な弱さとは、四次元ポケットから便利な「ひみつ道具」を出して助けてくれる、ドラえもんに対する依存体質のことである、というわけです。逆にいえば、強い人間とは、誰にも依存しない人間、自分のことは自分で決められる人間、自立した人間である、ということでしょう。

思えば、不思議なのは、次のことでした。

のび太は、頭が悪くて、運動もさっぱりできず、弱気でなまけ者で、同じ失敗を何度もくりかえし、いじめられてばかりだけれども、それでも「いちばん人間[1]にとってだいじなこと」を見失わずにいられる。やさしく、他人想いな、「まっ

とう」な人間でいられる。のび太は、どうして、そんな人間でいられるんだろう？わたしには今も、それはとても驚くべきこと、奇蹟的なことに[2]思えます。その奇蹟のような不思議さが「ドラえもん」という作品の「ひみつ」なのではないか。いつもドラえもんがそばに寄りそってくれ、未来の万能の科学と技術で支援したりケアしたりしてくれるから、というだけだとは思えません。

そもそもドラえもんはなぜ、二二世紀の未来から一九七〇年頃ののび太のもとへとやってきたのか。

のび太があまりにもダメな人間だったからです。

「てんとう虫コミックス」の第一巻、第一話「未来の国からはるばると」によれば、大人になったのび太が借金をつくって、その借金を子孫の代まで返しきれなくなった。それでのび太の孫の孫にあたるセワシが一計を案じて、未来のロボットであるドラえもんにのび太のお世話（支援、ケア）をさせて、よりマシな方向へと歴史を改変しようとした。そういう事情がありました。

セワシによれば、のび太は「なにをやらせてもだめなんだもの。勉強もだめ、スポーツもだめ、じゃんけんさえ勝ったことがない。だから、おとなになってもろくなめにあわないんだ。」

それは「おそろしい運命」だとも言います。たしかに、これはおそろしい運命といわざるをえません。じゃんけんにすら勝ったことがない、とは・・・(思えばのび太は、全問〇×のテストで０点を取る、という奇蹟的なことを[3]やってのける人間なのです。)

けれども、よく知られているように、「のび太の結婚前夜」という話では、のび太は将来長年の憧れだったしずかと無事に結婚することになります。

結婚前夜になって不安になって、結婚をとりやめる、と言い出したしずかに対して、しずかのパパは次のように言ってしまいました。

「のび太くんを信じなさい。のび太くんを選んだ君の判断は正しかったと思うよ。あの青年は人のしあわせを願い、人の不幸を悲しむことのできる人だ。それがいちばん人間にとってだいじなことなんだからね。かれなら、まちがいなくきみをしあわせにしてくれるとぼくは信じているよ」

有名な言葉です。あらためて読みかえしてみると、しみじみといい言葉だと思います。のび太が決して忘れない「いちばん人間にとってだいじなこと」とは、いわば、人間としての「まっとうさ」のようなものです。「まっとうさ」とは、他人の善悪をサ①バくような「正しさ」とは、微妙に異なります。（ここでは「まっとうさ」を「倫理」と呼び、「正しさ」を「道徳」と呼んでおきます。）

のび太の「まっとうさ」（倫理）とは、他人のよろこびを自分のよろこびとするように行為せよ、ということではないでしょうか。のび太はそれを自然にできる人なのです。

人のしあわせを願い、人の不幸を悲しむということ。これは他人の不幸や悲しみに同情するとか、他人のよろこびに共感するということとは、少し違います。4憐れみとか共感ではなく（それは上から目線の身勝手な情動でありえますから）、他者のよろこびによって自らをよろこばせよ。他者の悲しみによって自らを悲しませよ。そういうことではないか。

それは自分の感情を「そのまま」他人の感情と一致させることではありません。他者（たち）のよろこびは、あくまでも他なるものとして、この自分のよろこびになりうるのです。自分だけで味わうよろこびは、決して自分を超えさせないからです。

それはもちろん、自分のよろこびを否定することではありません。他者のしあわせを自分のしあわせよりも優先することではない。

そうではなく、自分だけのよろこびには、つねに限界があるのです。他者のよろこびを自分のよろこびに変えられる人間は、自分だけのよろこびの限界を超えていけるのです。それは他者の悲しみによって自分の限界を超えて深く遠く悲しめる、ということでもあります。

他者のよろこびによって自分のよろこびの限界を超えよ。また同時に、他者の悲しみによって自分の悲しみを超えよ。ありふれた日常をそのように生きよ。それが「しあわせ」の意味なのです。

他者のよろこびが自分のよろこびになる。 他者の悲しみによって自分が悲しくなる。なんだか、ものすごく当たり前のことのようですが、それこそが人としてのまっとうさであり、人間としていちばん大事なものなのです。

しかものび太のラジカルと言っていいそのやさしさは、人間のみならず、さまざまな他者に向けられていきます。 動物、恐竜、昆虫（アリ）、植物(キー坊、タンポポ)、妖精、台風、石ころ（！）[5]

のび太くんが「しあわせを願う他者とは、自分の家族や友達にかぎられないし、自分に親切にしてくれる人、自分を愛してくれる人にもかぎられないのです。自分に意地悪をしたり、自分をいじめてきたり、自分とはテキタイ[②]する人たちでもありうるのです。くりかえしますが、同じ人間にすらとどまっていないのです。他の惑星から来た宇宙人かもしれないし、動物、植物、ロボット、精霊や台風の子、石ころであるかもしれない。

のび太くんはきっと、あまり賢くないし、利口でもないのでしょう。聖人でも偉人でもありません。おっちょこちょいでもあります。しかし、他者のしあわせが自分のしあわせでもある、というのび太くんの愚かさは、まさに、その愚かさのままに、「倫理的＝まっとう」でもあるのではないか。

思えばのび太が強いられたダメさ、のび太の根源的な弱さとは、本人の自己責任ではなく、意味も理由もないようなダメさであり、弱さなのでした。生まれつき勉強ができず、運動ができず、顔もよくなかった。それは努力以前のものです。

トランプやカードゲームでいえば、「 X 」だから未来の孫の孫のセワシはそれを「おそろしい運命」と言ったのです。

なんの意味も理由もない不幸を強いられたなら、人間はきっと悪いことをする、性格がひねくれてしまう。わたしたちはそう考えがちです。しかし、そういう人間がいることは事実だとしても、誰もが必ずしもそうなるとはかぎりません。逆かもしれません。生まれつきダメで、無力で、無能であること、それはのび太にかぎらず、人間の普遍的な[6]生存条件のようなものであり、のび太は本能的にそれ[7]をよく知っているからこそ、誰よりもやさしい、ラジカルなまでにやさしいのかもしれない。

弱くダメであることをこじらせてしまうこと[8]と、その「運命」をうけとめて、弱くダメであることを生きることは、微妙に異なることではないか。

力のあるジャイアンでも、親が金持ちのスネ夫でも、すべてにおいて万能な出木杉でもなく、弱虫でなまけ者だけれども、他人の不幸を悲しみ、他人のしあわせを素直によろこべるのび太が『ドラえもん』という「国民的」あるいは「世界的」な作品の主人公である、ということ、それはやはり、とても重要なことではないか。

『ドラえもん』がわたしたちの世界にあってくれてよかった。のび太がいてくれてよかった。素直にそう思います。

そしておそらくこれは、のび太だけの個人的な話にはかぎらないことなのです。たとえのび太のような人間であっても社会的に排除されたり、見捨てられたりすることなく幸福に生きていけるということ――大げさな言い方をすれば、そこに、この国が長い時間をかけて成長させ、成熟させてきた夢があり、希望があるのかもしれないのです。

たとえばわたしは、ある中国からの留学生である男性から、次のような話を聞いたことがあります。彼らにとってのび太の存在はささやかな安らぎだったというのです。

のび太はべつに特別な力や正義感をもったヒーローではありません。そういう人間がアニメの主人公でいられるということ。それは、中国の競争社会の苛酷③さに疲れた自分たちにとっての癒やしになったというのです。

もちろんのび太のような存在に共感しない学生さんもたくさんいました。みんながのび太のようになまけたり、他人に依存したりしていては、この世の中は回っていかないのではないか。そういう意見も目立ちました。

けれども、それならば、出木杉のような人間になりたい、出木杉に憧れるのかというと、そうではない、とも言うのです。出木杉は勉強もでき、運動もでき、顔もよく性格もいい。人格者ですらあります。まさに完璧な人間です。「でも、なぜか出木杉君は嫌なんですよ！」と言うのです。

できすぎることは必ずしもいいことではない。その直観的な判断にはなにか大切な価値観があるのかもしれません。

わたしたちは、のび太のような存在を目の前にすると、せっかちに「弱くてもいいんだよ」と全肯定するか、「やっぱりそのままじゃだめだ」という道徳的な裁断をくだしがちです。

しかし、弱さを生きるということは、自己肯定（ありのままの自分でいいんだ）と自己嫌悪(このままじゃダメなんだ)の葛藤の中で生き続ける、ということではないでしょうか。のび太は、自分の弱さ、ダメさの中でそうしたシコウサクゴ④を続けていきます。

「男らしく必ず成功しなければならない」ではなく、「ダメなままでもいい」でもなく、「運命＝業⑤」としてのじぶんの弱さに対峙⑥して、それでもなお基本的には笑ってみせる。弱さをあまりこじらせず、弱さとともに生きていこうとする。それがのび太の「生き方」(日常哲学)であり、プラグマティック（実践的）な智慧ではないでしょうか。

そこにはいわば、オルタナティヴな、別様の、もう一つの自己啓発9がある。それは、自分の中の欠点や弱点をも何とか生かそうとする自己啓発であり、弱さがもたらす葛藤や矛盾とともに人格を成長させていく、そうした生き方のことです。

わたしたちは自分の人格や存在価値を過度に低く見積もったり、自分と他人を延々と比較してしまったり、自己嫌悪の泥沼にはまってしまったりします。鬱々として、動けなくなって、何をしても空回りしてしまう。それが弱さをこじらせる、という意味です。

それに対し、のび太の生き方が教えてくれるのは、次のようなことです――自分の弱さ・ダメさ・男らしくなさを全否定したり、抑圧したりしなくてもいい。失敗したり、空回りしたり、笑われたり、なまけもので非生産的であったりしながら、自分の長所も短所も、いいところもダメなところも、それなりに愛していいのだ、と。たとえりっぱな人間にはなれなくても、成長し続けること、まっとうであろうとし続けることはできるんだ、と。自分の中の無能さや弱さを尊重しながら、自己実現していくことだってできる。のび太はわたしたちをそんな気持ちにさせてくれないでしょうか。

問一　傍線①から⑥までのカタカナを漢字で書き、漢字はその読みをカタカナで書け。

問二　のび太はなぜ、傍線1『『いちばん人間にとってだいじなこと』を見失わずにいられる」のか。解答欄の語句につながるように文中から二十五字以内で抜き出して書け。

問三　傍線2、3「奇蹟的なこと」とあるが、それぞれの「奇蹟」の内容を次の中から一つずつ選び、記号で書け。

ア　ドラえもんに依存しているのにまっとうな人間であること

イ　弱いのにやさしくまっとうな人間であること

ウ　頭が悪く運動も出来ないのに加え怠け者であること
エ　すべての問題で間違えてしまったこと
オ　二分の一の確率で正解する問題をすべて誤ったこと
カ　小学生のテストで０点をとってしまうこと
キ　神などの超自然的な力がはたらくこと

問四　傍線４「憐れみとか共感」とはどういうことか。それぞれの言葉を言い換えた語句を「憐れみ」は十五字以内、「共感」は二十五字以内で「こと」につながるように抜き出して書け。

問五　傍線５「石ころ（！）」とあるが、石ころにまでやさしいのび太に対して、二つの対照的な評価がある。それぞれの評価を「のび太は」という主語に続く形で文中から二十字程度で抜き出して書け。

問六　空欄 X にはどのような語句が入るのか。次の中から最も適切なものを選んで記号で書け。

ア　大切な場面で切るカードを間違えてしまう。タイミングが悪すぎる。
イ　最終ターンでカードを無駄に使ってしまう。間が悪すぎる。
ウ　さんざんに負けて気持ちが萎縮する。気持ちが弱すぎる。
エ　最初に配られたカードがあまりにも悪すぎる。スペック(仕様)が悪すぎる。

問七　傍線６「普遍的な」、９「啓発」の意味として最も適切なものを一つ、それぞれの選択肢から選んで記号で書け。

６　普遍的な
ア　人間の道理にかなっていること
イ　絶対的で状態が変わらないこと

ウ　いつでも誰にでも共通していること
エ　存在が妥当で間違いがないこと

9　啓発

ア　知識ではなく経験の中で自分に対する認識を深めること
イ　自分についてより高い理解や認識に導かれること
ウ　自分の弱点を認めることで強靭に生きていくこと
エ　自分が何者なのかを知り自分なりの生き方を見出すこと

問八　傍線7「それ」の指示する内容として最も適切なものを次の中から選んで記号で書け。

ア　すべての人間はある意味で無力であること
イ　不幸な人間がみんなひねくれるわけではないこと
ウ　自分の弱さが自分の責任ではないこと
エ　不幸を強いられた人間が悪いことをするわけでないということ

問九　傍線8「弱くダメであることをこじらせてしまう」状態を比喩的に表現した箇所を、文中から十五字以内で抜き出せ。ただし解答欄の「こと」につながるように文末の一字を替えて書け。

問十　筆者はドラえもんの魅力はどこにあると言っているのか。次の中から最も適切なものを選んで記号で書け。

ア　のび太は弱いが、弱いからこそ他人の幸せを喜び人の不幸を悲しんで誰よりも優しくあることができており、弱いのび太が主人公でいる物語にわたしたちは慰められ励まされる。
イ　のび太には自分を犠牲にしてでも他人を思いやるやさしさがあり、競争社会で生きることに疲れたわたしたちに、弱くても成長し続けられるしやさし

さこそが真の強さだと教えてくれる。

ウ　ドラえもんはのび太の子孫が当初計画したように未来を変化させることは出来なかったが、弱く優しいのび太を支えて尊重することでわたしたちに人としての大切な価値観を示してくれる。

エ　ドラえもんの魅力は、未来から来たドラえもんが弱いのび太に寄り添い未来の科学と技術で助けてくれることにあり、人の弱さや優しさが支えられる物語にわたしたちは癒やされる。

問題二　次の文章は宮本輝の「泥の河」の一節で、少年二人が出会う場面である。読んで後の問いに答えよ。

雨ざらしになった荷車の傍らで、傘もささず立ち尽くしている子供がいた。荷車には薦（こも）がかぶされていたが、その薦の下にはまだ鉄屑が乗せられたままであった。台風が近づいていた。民家は窓に板を打ち付けてひっそりと身をかがめている。細かな雨と一緒に、わらの塊①りやつぶれた木くずの残骸が路面を走っていく。

信雄は二階の雨戸を微かに開いて少年のうしろ姿を見つめた。そんな風に一人の人間を盗み見たのは、信雄には初めてのことであった。ふり乱れる大きな柳の緑が、人も車も途絶えた灰色の道端にぽつんと佇んでいる少年を、いまにも絡みこんでしまいそうに思えた。信雄は両親に気づかれないようにして階下に降り、そっと表に出た。そして少年に近づいていった。雨にぬれることも風にあおられることも意に介さず、なぜか吸い寄せられるように歩いていったのである。

少年の二、三歩うしろで立ち止まり、しばらく同じように立ちつくしていた信雄は、自分でも驚くほど甲高い声を張り上げた。「何してんの？」少年はぎょっとして振り返り、しずくのしたたっている顔で信雄を見つめた。そしてにっと笑いながら、「この鉄、高こう売れるで」といった。少年が鉄屑を盗もうとしていることに気づいた信雄は居丈高に叫んだ。「あかんでぇ。これは人のもんやでぇ、盗ったらあかんでぇ」これは死んだ男の大切な商売物だったのだという思いがあ

った。「そんなこと分かってるわい。・・・盗れへんわい」そう言いながら、少年はもう一度媚びるように笑った。[c]信雄はそれでも安心できないというふうに少年を見張っていた。

遠くから貨物船の汽笛が鳴り響き、それと同時に雨が急に太くなった。降り注ぐ雨の中で、信雄はそっと少年の顔をうかがった。愛嬌のある、妙に人を引き付ける丸い目であった。厚い唇が半分開いて、そこから白い小さな歯が見える。

「この鉄、馬車のおっさんのやろ」「・・・うん」うなずきながら、信雄はなぜ少年がそのことを知っているのかと思った。「あのおっちゃん、こないだここで死にはったんや」信雄は上目遣いでそうつぶやいた。途方にくれたとき、信雄はいつもそうやって間をつなぐのである。

「僕の家、あそこや」[2]突然、少年は土佐堀川の彼方を指さしたが、雨にかすんだ風景の奥には、小さな橋の欄干がぼんやり屹立[②]しているだけだった。「どこ？よう見えへんわ」少年は市電のレールを横切ると、端建蔵橋の真ん中まで走っていった。信雄も後を追った。「あそこや。あの橋の下の、・・・ほれ、あの舟や」目をコ[③]らすと、湊橋の下に、確かに一艘の舟がつながれている。だが信雄の目には、それは橋げたにからみついた汚物のようにも映った。「あの舟や」「・・・ふうん、舟に住んでんのん？」「そや、もっと上におったんやけど、きのうあそこに引っ越してきたんや」少年が欄干にもたれてほおづえをついたので、信雄もそれをまねて横に並んだ。背は信雄の方が少し高かった。「寒ないか？」と少年が聞いた。「うん、寒ない・・・」二人ともずぶぬれだった。雨は横なぐりに強く降ったかと思うと段々小降りになり、またにわかに強くなる。そんな状態をいつまでも繰り返していた。

その時、家々の軒下にまでせりあがってきた濁水をぼんやり見下ろしていた少年が、あっと声を張り上げて信雄の肩をつかんだ。「お化けや・・・」[3]「えっ、なに？お化けてなに？」信雄も少年の視線を追ってうす暗い川を覗き込んだ。「お化[3]けや。あそこ見てみィ。あそこや、でっかい鯉が泳いどるやろ」

降りしきる雨が粘土色の川面に無数のハモン④を落としていた。濃い藍色の水がその中で縞模様を描きつつ渦巻いている。汚物の群れが橋げたにぶつかってくるくる回っていた。信雄はしたたるしずくを掌でぬぐうと、必死になって川面を探った。

「うわあ！」そして思わず叫んだ。薄墨色の巨大な鯉が、まるで雨に打たれるために浮き上がってきたかのように、水面でゆっくりと円を描いていたのである。

「僕、こんなごっつい鯉、初めて見たわ」実際、鯉は信雄の身の丈ほどもあった。鱗の一枚一枚が薄い紅色の線でふちどられ、丸く太った体の底から、何やら妖しい光を放っているようだった。「僕はこれで三回目や。前に住んでたとこで二回見たわ」少年はそう言ってから信雄の耳元に口を寄せた。「誰にも言うたらあかんで」「何を？」「この鯉見たことや」なぜ口外してはいけないのかわからなかったが、信雄は唇をぎゅっとかみしめると大きくうなずいて見せた。得体のしれない少年との間でひとつの秘密を共有しあったことが、信雄の心をときめかせたのであった。鯉はやがて身を翻⑤らせて、土佐堀川の速い流れの中にもぐっていった。

その夜、信雄は高い熱を出した。「こんな雨ン中、何しに表に出たんや！」母がしつこく問いただしたが、信雄は黙っていた。信雄は目を閉じた。鯉[4]に乗った少年が泥の川をのぼっていく。

しばらくして父と母が寝入ったのを確かめると、信雄はそっと起きあがり、川に面した階段のそこだけ板を打ち忘れた小さなガラス窓から、少年の家を捜した。対岸の家々に灯されたろうそくの光が、吹きすさぶ雨のなかでちらちら並んでいた。そして湊橋があるあたりの、川面すれすれの所で、人魂のように頼りなげに上下している黄色い灯を見つけた。ああ、あれがあの子の家かと思うと、信雄はガラスに顔を押し当てて、魅入られたように眺めつづけていた。

翌日、台風が去った後の湊橋に立ち、信雄はしげしげと舟の家を見た。廃船を改造して屋根をつけたものらしい。舟には入口が二つあり、そのどちらにも長い板が渡されていた。人の気配はなかった。というより、人を寄せ付けない淋しさが漂っているのを、信雄は子供心にも感じ取っていた。入っていくこともためら

われて、彼はじっとたたずんでいた。

その時、誰かにうしろから肩を叩かれた。振り向くと、少年が大きなバケツをさげて立っていた。「遊びに来たん？」少年はフシンげ⑥に信雄の顔をのぞきこんだ。信雄はあらぬ方を見やりながらうなずいた。招かれてもいないのに、こうして訪ねてきたことが恥ずかしかったのであった。それで信雄はとっさに嘘をついた。「きのうの鯉、またあそこに浮いてるで」「えっ、ほんまか！」言うが早いか、少年は走りだしていた。信雄も走った。走っているうちに、信雄は本当にお化け鯉が姿を現していそうな気がしてきた。端建蔵橋の真ん中から川を見下ろした。「どこにおった？なあ、どこらへんにいとった？」信雄は川面を指さした。「・・・ふうん、もう早いとこもぐってしまいよったんやなあ」少年は残念そうにため息をついている。

※「僕の家、おいで。なあ、おいでェな」信雄の顔をじっと見つめながら、少年がそう言って、手を引いた。細い道を降り、渡しに足をかけようとして、信雄は岸辺のぬかるみにはまり込んだ。「うわあ、靴の中までどろどろや」膝のところまで埋まった信雄の片足を引き抜くと少年は大声で叫んだ。「姉ちゃん、姉ちゃん」信雄よりも二つ三つ年上の、色の白い少女が舟の家から顔を出し、前髪を両手で左右に分けながら信雄を見た。目元が弟とよく似ている。「あそこのうどん屋の子ォや」対岸に見えている信雄の家を少年は姉に教えた。少女は舟から出てくると、黙って信雄をへさきの所まで連れて行き、座らせて足を川に突き出させた。そして舟の中からひしゃくで水を汲んできた。「お名前、なんていいはるのん？」「・・・板倉信雄」「何年生や？」「二年生」「ほな、きっちゃんとおなじやなあ」きっちゃんというのが少年の呼び名だった。信雄ははにかみつつも、姉弟に名を尋ねた。そんなことは大人だけがするものとだと思っていたので、信雄は尋ねながら顔を紅潮させた。「僕は、松本喜一や」姉は銀子と名乗った。「どこの学校？」「学校、行ってない」と答えて姉を見た。※

少女は丹念に信雄の足を洗った。水がなくなると舟の中に入っていき、また水

を汲んでくるのである。少年が川の水を汲み上げてズック靴を洗ってくれた。信雄は流れてきた西瓜の皮をぼんやり眺めながら、されるままになって足を投げ出していた。

7

問一　傍線①から⑥までのカタカナは漢字で書き、漢字はその読みをカタカナで書け。

問二　傍線1「そんな風に一人の人間を盗み見たのは、信雄には初めてのことであった。」とあるが、その後の信雄の行動の中から同じ感覚を持つ箇所を二十字以内で抜き出し、前後三字を書け。

問三　傍線a「にっと笑いながら」b「居丈高に叫んだ」c「媚びるように笑った」について、その時の気持ちを説明した次の中からそれぞれ最も適当なものを選び、その記号を書け。

a「にっと笑いながら」

ア　本気で盗ろうとは思っていないが、冗談めかして言ってみた。

イ　高く売れることに共感してもらえると思って、卑屈に笑った。

ウ　高く売れることを知っていると、大人びたところを見せたかった。

b「居丈高に叫んだ」

ア　少年が今にも盗みを働きそうな気がして強く諌めた。

イ　正義感から悪は許せないという思いで威圧的にいった。

ウ　おじさんの鉄をどうしても守らねばと強く抗議した。

c「媚びるように笑った」

ア　これでは鉄を売るのは無理だからと思い、この場を取り繕って笑った。

イ　冗談が通じなかったようだ、機嫌を取っておこうと笑ってごまかした。

ウ　同じ年頃の少年に注意されたことだし、照れ隠しに笑っておこう。

問四　傍線２「僕の家」について、A、B、C、三つの問いに答えよ。

A　信雄が少年の家を見た時の第一印象が述べられている箇所を一文で抜き出し、初めの七字を書け

B　信雄がその夜少年の家を見た時の印象が述べられている箇所を一文で抜き出し、始めの七字を書け。

C　信雄が少年の家を見た時の二つの印象から、信雄が少年の家について思ったことを、次の中から最も適当なものを選び、その記号を書け。

ア　最初は汚い舟が家であることに驚いて、どうしてあんな舟に住んでいるのだろうと不思議に思った。が、夜、うす暗い光の中で確認した時はあんな舟にでも住めるのだと、昼間の少年の顔を思い出し、自分たちとは違う世界で生活しているのだと思った。

イ　汚い水に浮かぶ粗末な舟に住んでいることに驚いた。が、夜、ろうそくの光に照らされ、風に揺れる舟を見て、少年には家族はいるのか、どんな生活をしているのか、寂しくはないのかと思った。

ウ　川を流れていくごみくずのような舟に人が住んでいるとは思えなかった。が、夜、うす暗い光の中で舟は頼りなげで、昼間のあの快活な少年とは違うどこか人を寄せ付けない淋しさがあると思った。

エ　最初は汚れた川に浮かぶ舟が家だとは思わなかったので、見つけられなかった。が、夜、光に照らされる舟をそっと見た時は現実の生活がそこにあり、自分の知らない大人の世界があるように思った。

問五　二箇所の傍線３「お化けや・・・」３「お化けや。」について、少年はなぜ「お化け」と思うのか。その理由を、「・・・るように思われるから。」に続くように二十五字以内で抜き出し、前後三字を書け。

問六　傍線４「鯉に乗った少年が泥の川をのぼっていく。」について、信雄には少年のどんな姿が浮かんでいるのか。次の中から最も適当なものを選び、その記号を書け。

ア　台風の中、得体のしれない少年がなれなれしく近づいてきて、思いがけなくお化け鯉を二人で発見したことは高熱に侵される信雄には現実に起こったこととは思えず、鯉と少年が絡み合った姿となって浮かんでいる。

イ　泥の川にかかる橋の上での怪しい少年との出会い、見たこともない大きな鯉の発見、秘密の誓い、全ては今、高熱に浮かされている信雄には夢の中の出来事で、物語の主人公のような少年の姿が浮かんでいる。

ウ　汚い物も流れてくるような台風の泥の川で、不思議な少年はお化け鯉を見つけ、二人だけの秘密を誓わせ、幼い信雄はその少年に魅了され、夢の中にまでその少年が鯉に乗って去る姿が浮かんでいる。

エ　雨の中での不思議な少年との出会い、お化け鯉の発見、初めての秘密の共有、それらが高熱にうなされる信雄の意識の中でないまぜになり、鯉に魅せられた少年の姿として浮かんでいる。

問七　傍線５「信雄は本当にお化け鯉が姿を現していそうな気がしてきた。」について、信雄はなぜそう思ったのか。次の中からその理由に当てはまらないものをひとつ選び、その記号を書け。

ア　お化け鯉は二人の固いきずなをつなぐものだから。

イ　お化け鯉は必ず少年の姿を見つけ浮かんでくるから。

ウ　お化け鯉は不思議な力を持っていると思うから。

エ　お化け鯉は懸命に探す二人の期待に応えるはずだと思うから。

問八　傍線６「目元が弟とよく似ている」とあるが、弟はどんな目元をしているのか。一文で抜き出し、その最初の七字を書け。

問九　※から※までの姉弟のやりとりと、『『学校に行ってない』と答えて姉を見た。」に注意して、この姉弟について、説明した次の中から当てはまらないものを一つ選び、その記号を書け。

ア　姉は、珍しく弟が連れてきた友達に対して「学校に行ってない」と答えるのを聞くのは悲しいが、自分たちの生活を弟の友達に偽りなく見せて、これが日常生活だとわかってもらい、同情ではなく、弟と仲良く付き合ってほしいと姉として思っている。

イ　『『学校に行ってない』と答えて姉を見た。」に顕著に表れているように、自分達の暮らしぶりを他人に知らせてもいいのかと、姉の判断を仰ごうとしているように弟はいつも姉を頼りにし、優しく穏やかな姉は自分達の生活を静かに受け入れている。

ウ　弟は「学校に行ってない」と答えながらも姉はそのことをどう思っているのか顔色をうかがうように「姉を見た」けれど、姉はそのことを気にしているようにも見えず、淡々と弟が連れてきた友達の世話をしている世慣れた大人っぽい雰囲気を持つ子供である。

エ　弟は学校に行ってないことは恥ずかしいことと思って「学校に行ってない」と返事しているが、姉は弟の気持ちもおもんぱかりながら、そのことを気にしていないように、卑屈にもならず姉弟助け合って生活している様子がうかがわれる。

問十　傍線7「信雄は流れてきた西瓜の皮をぼんやり眺めながら、されるままになって足を投げ出していた。」について、この時の信雄の気持ちを説明した次の中から最も適当なものを選び、その記号を書け。

ア　信雄は二人からの思いがけない世話を受け、台風後の川の流れに身を任せて、全てを水に流すような気持になっている。

イ　信雄は二人の世話で汚れが流されていくに従い、心まで洗われているような心地になり、素直に喜ぶ気持ちになっている。

ウ　信雄は二人に泥を落としてもらいながら、さっきまで姉弟に感じられた違和感が洗い流されるような気持ちになっている。

エ　信雄は姉との大人っぽい会話により、姉とも親しくなれたような恥ずかしいけど、うれしい気持ちになっている。

問題三　次の傍線の語の意味を選び、その記号を書け。

①将来のことを漠然と考える。

ア　のんびりと　イ　目まぐるしく

ウ　いつになく　エ　ぼんやりと　オ　しんみりと

②相手のけんまくにたじろぐ。

ア　ひるむ　イ　身じろぐ　ウ　震える　エ　応える

オ　抗う

③私として彼は気の置けない間柄だ。

ア　気を遣う　イ　気が気でない　ウ　気を許せない

エ　気遣いのない　オ　気が引ける

④「大学には行かない」と息子が唐突に言うので、母は驚いた。

ア　いたずらに　イ　出し抜けに　ウ　おもむろに

エ　したたかに　オ　穏やかに

⑤社会人なら与えられた仕事を全うするのが当然だ。

ア　引き受ける　イ　押しつける　ウ　成し遂げる

エ　立ち上げる　オ　成りあがる

⑥大事な仕事だということは納得ずくで引き受けた。

ア　納得したうえで　イ　納得できないで　ウ　納得しかけて

エ　納得しようとして　オ　納得するか迷って

⑦親子の確執が生じる。

ア　互いに強情を張りあうこと　イ　対立すること

ウ　反対すること　エ　喧嘩すること　オ　仲直りすること

⑧教室の窓の外ばかり見て、授業はうわの空だ。
ア　空想する　イ　一点を見つめる　ウ　集中できない
エ　想像する　オ　空を見つめる

⑨彼は妹に勉強を見てと頼まれまんざらでもない顔をした。
ア　たのもしい　イ　満足する　ウ　不満である
エ　うれしがる　オ　必ずしも嫌ではない

⑩妹は母親に金遣いが荒いと言われふてくされた。
ア　泣き出した　イ　告げ口した　ウ　寝てしまった
エ　反抗的になった　オ　顔をそむけた

問題四　次の（　　）から適当なカタカナ語を選び、その記号を書け。

①夢を追いかけずに（あ　リアリズム　い　リリシズム　う　ニヒリズム　）に徹することが成功の極意だ。

②近代における学問の（あ　ダイナミズム　い　パラダイム　う　パラレル　）をわかりやすく提示する。

③現代の情報化社会では（あ　メンタル　い　フィクション　う　メディア　）の影響は大きい。

④人体は微小な（あ　スタンス　い　アース　う　コスモス　）とも呼べるような存在である。

⑤環境問題は（あ　グローバル　い　リバイバル　う　レトリック　）な視点で対策を考える必要がある。

⑥民族の（あ　アイテム　い　アイデンティティ　う　エコロジー　）は言語にあることを思い知った。

⑦世界の始まりに（あ　ロゴス　い　ログ　う　エトス　）と神がすでに存在したと言われる。

⑧乳幼児の早い段階から（あ　エゴ　い　エスプリ　う　イメージ　）はすでに芽生えている。

⑨「急がば回れ」や「負けるが勝ち」などは（あ トリック い コモンセンス う パラドックス ）の典型である。

⑩第二次世界大戦後、世界中で（あ イニシエーション い イデオロギー う シャマニズム ）の対立が見られた。

入学試験過去問題②　解答用紙

受験番号

氏名

得点

問題一

問一
①
②
③
④
⑤
⑥

問二
できるから

問三
2
3

問四
共感
憐れみ
こと

問五
のび太は
のび太は
こと

問六

問七
6
9

問八

問九
こと

問十

問題二

問一
①
②
③
④
⑤
⑥

問二
↓
↓

問三
a
b
c

問四
A
B
C

問五
るように思われるから。

問六

問七

問八

問九

問十

問題三

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩

問題四

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩

入学試験過去問題　模範解答②

問題一

問一
①裁
②敵対
③カコク
④試行錯誤
⑤ゴウ
⑥タイジ

問二
他人のよろこびを自分のよろこびとするように行為できるから

問三
2 イ
3 オ

問四
共感
感情と一致させること
自分の感情を「そのまま」他人の
憐れみ
他人の不幸や悲しみに同情する
こと

問五
のび太は（きっと、）あまり賢くないし、利口でもない
のび太は誰よりもやさしい、ラジカルなまでにやさしい

問六
エ

問七
6 ウ
9 イ

問八
ア

問九
自己嫌悪の泥沼にはまってしまうこと

問十
ア

問題二

問一
①カタマ
②キツリツ
③凝
④波紋
⑤ヒルガエ
⑥不審

問二
なぜか↓いった
吸い寄↓いったも可

問三
a ア
b イ
c イ

問四
A だが信雄の目に
B あ あ、あれがあ
C ウ

問五
丸く太↓っているように思われるから。

問六
エ

問七
イ

問八
愛嬌のある、妙

問九
ア

問十
イ

問題三

①	エ
②	ア
③	エ
④	イ
⑤	ウ
⑥	ア
⑦	ア
⑧	ウ
⑨	オ
⑩	エ

問題四

①	あ
②	い
③	う
④	う
⑤	あ
⑥	い
⑦	あ
⑧	あ
⑨	う
⑩	い

この模範解答は、本校のオープンキャンパスに参加した方や本校の教職員が直接対応させて戴いた方のみに配布しているものであり、郵送等での配布は一切しておりません。
許可なく複製（コピー）をとることを固く禁じます。

③

入学試験過去問題

国語

【試験時間６０分】

この過去問題は、本校のオープンキャンパスに参加した方や本校の教職員が直接対応させて戴いた方のみに配布しているものであり、郵送等での配布は一切しておりません。許可なく複製（コピー）をとることを固く禁じます。

学校法人穴吹学園

問題一　次の文章は國分功一郎「中動態の世界　意志と責任の考古学」の一部分である。読んで後の問いに答えよ。

意志とは実に身近な概念である。日常でもよく用いられる。だが、それは同時に謎めいた概念でもある。

意志とは一般に、目的や計画を実現しようとする精神の働きを指す。

意志は実現に向かっているのだから、何らかの力、あるいは原動力である。ただし、力ないし原動力とはいっても、制御[1]されていない剥き出しの衝動のようなものではない。意志は目的や計画をもっているのであって、その意味で意志は意識と結びついている。意志は自分や周囲のさまざまな条件を意識しながら働きをなす。おそらく無意識のうちになされたことは意志をもってなされたとは見なされない。夢遊病者の歩行はその人物の意志による行為とは言われないだろう。

意志は自分や周囲を意識しつつ働きをなす力のことである。意志はそれまでに得られたさまざまな情報をもとに、それらに促されたり、急き立てられたりと、さまざまな影響を受けながら働きをなす。

ところが不思議なことに、意志はさまざまなことを意識しているにもかかわらず、そうして意識された事柄からは独立しているとも考えられている。というのも、ある人物の意志による行為と見なされるのは、その人が自発的に、自由な選択のもとに、自らでなしたと言われる行為のことだからである。誰かが「これは私が自分の意志で行ったことだ」と主張したならば、この発言が意味しているのは、自分がその行為の出発点であったということ、すなわち、さまざまな情報を意識しつつも、そこからは独立して判断が下されたということである。

意志は物事を意識していなければならない。つまり[2]、自分以外のものから影響を受けている。にもかかわらず、意志はそうして意識された物事からは独立していなければならない。すなわち[3]自発的でなければならない。この矛盾をどう考えたらいいだろうか？

この段階でも、この概念には何らかの困難が見出されることが分かる。意志は自分以外[4]

のものに接続されていると同時に、そこから切断されていなければならない。われわれはそのような実は曖昧①な概念を、しばしば事態や行為の出発点に置き、その原動力と見なしている。

中略

ならば、そのような曖昧なものの存在を信じているがゆえに、能動／受動という曖昧なる羽目になっているとは言えないか？能動／受動の区別の曖昧さとは、要するに、意志の概念の曖昧さなのではないか？

すると、われわれは意志などという不確かな概念に依拠②すべきではないし、意志など幻想であるから、そんな概念は投げ捨てねばならないと思われるかもしれない。

A しかし、本当にそれで問題は解決するのだろうか？

授業中に学生がうとうと居眠りしていれば、教師はそのことを叱責する。だが、詳しく問いただしたところ、その学生がたとえば、「実は交通事故で両親を亡くして、幼い妹と弟のために毎晩アルバイトをしているんです。だからなかなか十分な睡眠がとれなくて、授業中なのに居眠りしてしまいました。すみません……」と事情を説明しはじめたらどうだろうか。教師はおそらく叱責したことを後悔するだろう。それどころか「そうか、身体に気をつけろよ」などと励ましの言葉すらかけるかもしれない。

B 授業中に居眠りをしていたという行為そのものは変わらない。なのになぜ、教師の対応は突如正反対のものになり、また、われわれもその変化に納得するのだろうか？ 彼が叱責の対象から外されたのは、居眠りという行為について、彼には責任がないと見なされたからである。どうして責任がないと見なされたのかというと、その家庭の事情ゆえに彼には選択の余地がなかったと判断されたからだ。

責任を負うためには、自分の意志で自由に選択ができなければならない。夜更かしをすることも、翌日の登校に向けて早く床につく③ことも、どちらも自分の意志で自由に選択できたにもかかわらず、夜更かしをして次の日の教室で居眠りをしたとき、人はその居眠りの責任を負わねばならなくなり、叱責の対象となる。毎晩アルバイトをしていた彼は、自分の意志で自由に選択する状況になかったと見なされたがゆえに、叱責の対象から外され

たのである。

これは言い換えれば、責任を負うためには人は能動的でなければならないということである。受動的であるとき、あるいは受動的であらざるをえないときには、人は責任を負うものとは見なされない。彼は睡眠時間を削ることを強いられる受動的な状態にあると[6]判断された。それゆえに、責任を負わされず叱責の対象から外されたのだ。

この例は、能動や意志といった概念が実に都合よく使われるものであることを示している。なぜならば、ある状況下では、幼い妹と弟のために毎晩アルバイトをするこの学生は、しっかりとした意志を有する人物であるとか、自分で考えて能動的に行動する人物であると評価されることが十分に考えられるからである。

それに対し、たとえば、早く寝ることもできたのに(テレビゲームなどをして)ずるずると夜更かしした学生は、しばしば、意志が弱い、受動的な人物と評されよう。にもかかわらず、その同じ彼が、授業中の眠りのために叱責される段になると、突如として、自由に選択できる意志をもった能動的な人物に転ずるのだ。

「お前は早く寝るか夜更かしするかを、自由に、自分の意志で、能動的に選択できる状況にあった。お前は夜更かしすることを選択した。そのせいでいま、お前は授業中だというのに居眠りをしている。居眠りの責任はお前自身にある。[7]お前は叱責されてしかるべきだ」というわけだ。

ここから分かるのは、人は能動的であったから責任を負わされるというよりも、責任あるものと見なしてよいと判断されたときに、能動的であったと解釈されるということである。意志を有していたから責任を負わされるのではない。責任を負わせてよいと判断された瞬間に、意志の概念が突如出現する。「夜更かしのせいで授業中に居眠りをしているのだから、居眠りの責任を負わせてもよい」と判断された瞬間に、その人物は、夜更かしを自らの意志で能動的に選択したことにされる。つまり[8]責任の概念は、自らの根拠として行為者の意志や能動性を引き合いに出すけれども、実はそれらとは何か別の判断に依拠しているということである。

授業中に居眠りしてしまったことの責任などはたいした問題ではない。ならば、意志や

能動性の有無が同じく曖昧であるが、問題としては深刻である事例、たとえばアルコール依存症の場合ならどうであろうか？ C アルコール依存に陥ったことの責任は本人にあるのだろうか？

人を強制的にアルコール依存症にすることは難しい。依存症者は、たしかに、自ら進んでアルコールの過剰摂取を始めたのである。その意味ではアルコール依存症に陥④ったことの責任は本人にあるようにも思える。

しかし、誰でも容易に想像できるだろうが、その人がアルコールを過剰摂取しはじめたのは、何か理由があってのことである。一言でいえば、何か耐えがたいものを抱えていたがために、アルコールによってそれに対処したのである。その意味では、アルコール依存症者がアルコールの過剰摂取を自らの意志で能動的に選択したのだと言うのは難しいだろう。

アルコール依存症の場合、それが選択されてしまった経緯を理解してもらうことは、容易ではないとはいえ不可能ではない。アルコールは多くの人が口にするものであるから、何らかの極端な事情ゆえにそれを過剰に摂取するに至った人の事例は十分に想像しうる。つまり、アルコール依存症の場合ならば、依存症者の曖昧な意志や能動性が、そのまま曖昧なものとして理解されることは十分に考えられる。

ところが、法が絡むと事態は突如困難になる。依存症の対象がアルコールではなくて、違法薬物であったらどうだろうか？ 人を強制的に薬物依存にすることは可能であり、またしばしばそうしたことが行われるが、そうではなく、違法薬物を自ら購入して使用した場合のことである。

この場合、その人は法によって罰せられる。つまり、自らの意志で能動的に薬物使用を選択したと見なされる。

その依存症者はたしかに、自ら進んで違法薬物を入手したのである。

それゆえであろうか、多くの場合、薬物依存に陥ったことの責任は本人にあると考えられている。特に日本では、薬物依存から復帰できない人物はしばしば、「意志が弱い」と非難される。違法薬物の中毒症状のために病院にハ⑤ンソウされた患者への治療を医師が拒否

することさえある。

しかし、事態を冷静に考察すれば、アルコールの場合と同様、違法薬物の使用もまた心身をめぐる何らかの耐えがたさと結びついていることは容易に想像できるだろう。実際、違法薬物の依存症者の多くが幼少時に耐えがたい暴力を経験していることが知られている。ならば、自らの抱えている耐え難い何かによって法を犯⑥す行為を促されたのだとして、そのことの責任はいったいどう考えればよいだろうか？ 何らかの罰は受けねばならないとしても、この行為を「本人の責任」と言って片付けてしまってよいのだろうか？

そこには、たしかに自ら進んで手を伸ばしたとはいえ、自らの意志による選択なのかはっきり言うこともできず強制されてはいないという意味では受動的ではなかったにせよ、かといって能動的であったとも言えない状態がある。そのことを考慮せずに一足飛びに責任を問うとすれば、それはあまりに粗雑ではなかろうか？

こうして考えてくると、あらゆる行為を能動か受動に配分することは、不正確であるどころか乱暴ですらあり、意志の概念もまたとても信用ならないものだという気がしてくる。そうした事例はまだ他にもたくさんあげることができるに違いない。

だが、こうして意志の概念や能動と受動の区別を批判できるのは、論じている側が平然としたままでいられる事例のみが取り上げられているからだとも考えられよう。つまり、直接には当人だけを害する事態や行為が取り上げられているということだ。

たとえばここで、殺人など他人を直接に害する行為に話が及んだらどうか？

これら憎むべき行為が問題となるや、われわれは、意志の概念やら能動と受動の区別やらを平然と批判してはいられなくなる。これら「乱暴」で「不正確」な概念を積極的に認めるようにすらなるかもしれない。そして、そうした行為を強制されたのでなければ、つまり、受動的にその行為の行為者にさせられたのでなければ、やはりその責任は本人に負わせるべきだと考えるだろう。その際の責任の根拠を、これらの概念に求めるようになるかもしれない。

このことは、意志の概念が引き合いに出されたり、行為が能動と受動とに振り分けられることには、一定の社会的必要性があることを意味している。

たしかに意志の概念は難題を抱えている。能動と受動の区別も不正確なものだ。だが、「意志など幻想だし、意志の概念に基づいた能動と受動の区別もまやかしだ」などと主張する者は端的に能天気である。その人物は、自らがこの概念や区別にすがらずにはいられなくなる場面が訪れるかもしれないことを想像できていないだけである。

問一　傍線①から⑥までのカタカナを漢字で書き、漢字はその読みをカタカナで書け。

問二　傍線1「制御されていない剥き出しの衝動」についてこの段落で説明されている内容として適切なものを二つ、次の中から選んで記号で書け。

ア　「剥き出しの衝動」は、意思と混同されてしてしまうことがある
イ　「剥き出しの衝動」は、目的や計画がないため意志とは異なるものだ
ウ　「剥き出しの衝動」は、力であるという点では意志と類似点を持つ
エ　「剥き出しの衝動」は、意識下にあっても現実とは結びつかない
オ　「剥き出しの衝動」は、夢遊病者の歩行をうながすものである

問三　傍線2「つまり」、3「すなわち」の接続詞の役割として適切な説明を次の中から選んで記号で書け。

ア　前の事柄に後の事柄を付け加えることを示す
イ　前の事柄をまとめることを示す
ウ　前の事柄を言い換えることを示す
エ　前の事柄を補足することを示す
オ　前と後の事柄を対比することを示す

問四　傍線4「意志は自分以外のものに接続されていると同時に、そこから切断されていなければならない。」とあるが、意志の持つこのような性質を端的に表す語を、これより前の段落から漢字二字で抜き出して書け。

問五　傍線5「選択の余地」とあるが、何の「選択」か。次の中から誤っているものを一

つ選んで記号を書け。

ア　アルバイトをするかしないか

イ　十分に睡眠をとるかとらないか

ウ　授業中に居眠りをするかしないか

エ　叱責されるかされないか

問六　傍線６「受動的な状態にある」と同じ内容を述べている箇所を、ひとつ前の段落から二十五字以内で抜き出して書け。

問七　傍線７「お前は叱責されてしかるべきだ」とあるが、叱責する理由について、一般に考えられている理由と、筆者の考える理由をそれぞれ３ページの文中からＡは三十字以内で、Ｂは十五字以内で抜き出して空欄に書け。

一般に考えられている理由

居眠りした者が、早く寝るか否かを（Ａ）から。

筆者の考える理由

叱責する者が、居眠りした者に対して（Ｂ）したから。

問八　傍線８「責任の概念は、自らの根拠として行為者の意志や能動性を引き合いに出すけれども、実はそれらとは何か別の判断に依拠しているということである。」とあるが、これと同じ考えを述べているものを次の中から一つ選んで記号を書け。

ア　行為者に意志や能動性があるか否かは、評価する者の根拠のない判断でしかない。

イ　現実には人は能動的に行動していたとしても叱責されたことに責任を負おうとはしない。

ウ　意志が弱い受動的な人物であっても自分の意志で能動的に選択できる状況がある。

エ　能動的であることを期待されることで人は負うべきでない責任を負わされてしまう。

問九　傍線Ａ「しかし、本当にそれで問題は解決するのだろうか？」という問いに対して、筆者が出した結論を述べている一文の初めの七字を書け。

問十　文中には、傍線B「授業中に居眠りをしていたという行為」、傍線C「アルコール依存に陥ったこと」、傍線D「殺人など」の三つの行為が説明されているが、三つの行為の関係について述べた文章として適切なものを次の中から二つ選んでその記号を書け。

ア　B「居眠り」、C「アルコール依存」、D「殺人など」の例はいずれも、一般に意志によって行われたとされる行為であるが、筆者はよく検討すれば、それらの行為は意志によって行われたと簡単には言いきれないと考えている。

イ　B「居眠り」は意志による行為の例だが、C「アルコール依存」は意志によるかどうかが曖昧な行為の例、D「殺人など」は意志とは関わりなく行われる行為の例であり、筆者は三つの例を明確に区別するべきだと述べている。

ウ　B「居眠り」、C「アルコール依存」、D「殺人など」はすべて行為者に責任を問うことができない例になっており、三つの例を順に出すことで、筆者は人がなぜ無責任な行為をするのかについて考えを深めている。

エ　B「居眠り」で筆者は非現実的なたわいもない例を仮定して読者の興味を引き、続いてC「アルコール依存」とD「殺人など」の現実におこっている例を挙げて、意志という抽象的な問題に読者の関心を向けようとしている。

オ　筆者は、B「居眠り」よりもC「アルコール依存」、さらにD「殺人など」と行為についての責任が大きくなる例を挙げ、行為者に意志があったと言い切れなくても責任を問わざるをえない状況がある難しさについて述べている。

問題二　次の文章は太宰治「右大臣実朝」の一節である。次の解説文を参考に、読んで、後の問いに答えよ。

解説　鎌倉幕府三代将軍源実朝は源頼朝と北条政子の次男で本文中「将軍家」と表記されている。この時二十五歳。実朝の兄、頼家の遺児公暁は本文中「禅師」と表記されている。この時十八歳。この出会いの二年後実朝は公暁に暗殺される。語り手である「私」は「将軍家」に十二歳の時から仕え、今は二十一歳になっている。京都から鎌倉に帰ってきた公暁を実朝の命令で訪れている。

建保五年七月のはじめ、鶴岳宮の僧院に、私は夜分にお訪ね申しましたが、禅師様は少しも高ぶるところのない、いかにも磊落[a]ぶりの御応接ぶりをお示し下され、部屋の中は暑い、海岸に出てみましょうと私を促して、外へ出ました。月も星もなくまことに暗い夜でございました。由比浦には人影もなく、ただあの、今年の四月以来なぎさに打ち捨てられたままになっている唐船の巨大な姿のみ、[1]不気味な魔物の影のように真黒くのっそりとそびえ立っているだけでした。

申しおくれましたがこの唐船は、陳和卿の設計により、その年の四月には出来上って、二七日にこれを海に浮かべんとして、午の刻から数百人の人夫が和卿の采配①に従い、力のあらん限りを尽くして曳きはじめましたものの、かほどの大船を動かすのは容易なことではないらしくまた和卿のお指図にもずいぶんいい加減なところがございましたようで、日没の頃に至ってやっと波打ち際に、わずかにへさきを曳きいれることができただけで、しかも、この遠浅の由比浦にとてもこんな大船など浮かべることのできないのは分かり切っていると、その頃になって言い出す者もあり、大船の出入できる浦ではなく、とにかく和卿に、最初からの見通しを改めて問いただしてみよう、ということになって和卿を探しましたところが、陳和卿はすでに逐電②、今日の日を楽しみに、早くから由比浦にお出ましになって大船の浮かぶのを今か今かと余念なくお待ちになっていられた将軍家もこの逐電の報をお聞きになって、もはや一切をお察しなされたようで、興ざめなお顔でお引上げになってしまいました。

あれほど鎌倉中を騒がせた将軍家の御渡宋も、ここにおいて、まことにあっけなく、きれいさっぱりとお流れになり、船はいつまでも浦の水際に打ち捨てられ、いたづらに朽ち損じて行くばかりのようでございました。ドリョウ③の広い将軍家においては、もちろん、御計画のとん挫[b]をいつまでも無念がっていらっしゃるようなことはなく、あの、大かたりものの陳和卿にたいしても、いささかもお怒りなさらず、

[2]ウマクイカナカッタヨウデス。

となにもかも御存じのような和④やかな御微笑を含んでおっしゃった事さえございまして、その後一度も御渡宋の御希望などおもらしになったことはございませんでした。

「この船で」と、禅師さまは立ち止まって、そのぶざまな唐船を見上げ、「本当に宋へ行

こうとなされたのかな。」「さあ、とにかく、鎌倉からちょっとでもお逃れになってみたいような御様子に拝されました。」

「ここへ坐ろう。浜は、やっぱり涼しい。私はこの頃、毎晩のようにここへ来て、蟹をつかまえては焼いて食べます。」「蟹を。」「法師だって、なまぐさは食うさ。私は蟹が好きでな。最も私のような乱暴な法師[3]もないだろうが。」「いいえ、乱暴どころか、かえって、お気が弱すぎるように私どもには見受けられます。」「それは、将軍家の前では別だ。あの時だけはまったく閉口[c]だ。自分のからだが、きたならしく見えてきて、たまらない。どうも、あの人は、まえから苦手だ。あの人は私をひどく嫌っているらしい。」

私はなんともお答えできませんでした。

「あの人たちには、私のように小さい時からあちこち移り住んで世の中の苦労をしてきた男というものがうす汚く見えて仕様がないものらしい。私はあの人に底知れずさげすまれているような気がする。あんな、生まれてから一度も世間の苦労を知らずに育ってきた人たちには、へんな強さ[4]がある。しかし、叔父上も変わったな。」「お変わりになりましたでしょうか。」「変わった。ばかになった[A]。まあ、よそう。蟹でもつかまえてこようか」。うむ、とうめいてお立ち上がりになって、「あの唐船の下に、不思議なくらいたくさん蟹が集まるのだ。陳和卿も公暁のために苦心して蟹の巣を作ってくれたくれたようなものです。しかし、あれもばかな男だ[B]。」

禅師様は、ざぶざぶ海へ入っていかれて唐船の船腹をおさぐりになったので、私もそれに続いて海へはいって禅師様のなさるとおりに船腹をさぐってみると、いかにも蟹が集まっている様子で、禅師様は馴れた手つきで大きい蟹を一匹ひきずりだすが早いが船板にぐしゃりとたたきつけて、砂浜へほうり上げ、あまりの無慈悲さに私は思わず顔をそむけました。

「ザンニン[⑤]でございます。およしになったら、いかがです。」私は砂浜へ引き上げてきてしまいました。

私達は小枝や乾いた海草など拾い集めました。五匹の蟹を浅く砂に埋めてその上に小枝や海草を積み重ねて火を点じ、やがてそのタキギ[⑥]の燃え尽きた頃に、砂の中から蟹を拾い上げられて、「食べなさい。」「いや、とても。」「それでは私がひとりで食べる。私は蟹が好

きなんだ。どうしてだか、ひどく好きなんだ。」おっしゃりながら、器用に甲羅をむいてむしゃむしゃ食べはじめて、ほとんど蟹に夢中になっていらっしゃるように見えながら、ふいと、「死のうかと思っているんだ。」「え？」私は、はっとして暗闇の中の禅師様の顔を覗き込みました。けれども、今度は、蟹の脚をかりりと噛んで中の肉を指で無心にほじくり出し、いまはもう蟹の他は何も考えていらっしゃらぬ御様子で、そうして、しばらくして、またふいと、「死んでしまうんだ。」そうして、また、かりりと蟹の脚をかじって、「鎌倉へ来たのが間違いでした。」「京都がそんなにお好きですか。」

5 「まだ私の気持ちがお分かりにならぬとみえる。京都は、嫌なところです。みんな見栄坊です。嘘つきです。口ばかり達者で、反省力も責任感も持っていません。だから、私の住むのに、ちょうどいいところなのです。軽薄な野心家には、都ほど住みよいところはありません。」「そんなに御自身を卑下なさらなくとも。」「叔父上があれほど京都をしたっていながら、なぜ一度も京都へ行かぬのか、そのわけを御存じですか。」「それは、故右大将家の頃から、京都とはあまり接近せぬ御方針で、故右大将さまさえ、たった二度上洛なさったきりで・・・」

「叔父上には京都が怖いのです。田舎者と言われるのが死ぬよりつらいらしいので、困ったことになるのです。野暮な者ほどきゃしゃで繊細なものにあこがれる傾きがあるようだが、あの人の日常を拝見するのに、ただ、都の人から笑われまいための努力だけ、それだけなんだ。あの人には京都が怖くて仕様がないんだ。まぶしすぎるんだ。京都の人に笑われないくらいのものになってから、京都へ行きたいと念じているのだ。やたらに官位の昇進をお望みになるのも、それだ。大いにもったいをつけてから、京都へ行きたいのだろうが、そんな努力は、だめだめ。みんな、だめ。田舎者のくせに、都の人の身振りをまねるくらいあさましく滑稽なものはないのだ。」

「叔父上があなたを私のところへよこしたのは、淋しいだろうから、お話相手なんて、そんななまぬるい目的じゃないんだ。私の様子をさぐろうと・・・」

「いいえ、違います。将軍家はそんないやしいことをお考えになる方ではございませぬ。」

「ああ、食った。すっかり食べてしまった。私は、蟹を食べているうちは何だか熱中してむねがわくわくして、6 それこそ発狂しているみたいな気持ちになるんだ。つまらぬこと

ばかり言ったように思いますが、将軍家に御密告なさってもかまいません。」と言って、さっさと帰っておしまいになりました。

闇の中にひとり残されて、ふと足元を見ると、食い散らされた蟹の残骸が、そこらじゅういっぱいに散らばっているのがほの白く見えて、そのはきだめのような汚さが、そのままあの人の姿だと思いました。

問一　傍線①から⑥までのカタカナは漢字で書き、漢字はその読みをカタカナで書け。

問二　傍線a「磊落」　b「とん挫」　c「閉口」について、本文中の意味と同じ意味を表している語を、次の中からそれぞれ選び、その記号を書け。

ア　大胆　イ　当惑　ウ　中止　エ　静寂　オ　無意味

カ　おう揚　キ　平気　ク　つまずく

問三　傍線1「不気味な魔物の影のように真黒くのっそりとそびえ立っているだけでした。」について、唐船がこうなるまでの経緯を参考に、この姿が象徴していることを次の中から三つ選び、その記号を書け。

ア　将軍家の不運な未来を象徴していること

イ　遠浅の由比浦に巨大な船を浮かべようとした無謀さを象徴していることこと

ウ　陳和卿といういかさま師を信用した将軍家の軽薄さを象徴していること

エ　乗船は不可能だと家来はいさめても聞く耳を持たなかった将軍家の横暴さを象徴していること

オ　闇の中でひときわ存在感を増す姿に将軍家の失望の大きさを象徴していること

カ　禅師が将軍家の失脚を狙って暗躍していることを象徴していること

問四　傍線2「ウマクイカナカッタヨウデス。」に込められた将軍家の心中を述べた次の中から、最も適当なものを選び、その記号を書け。

ア　誰も成し遂げられなかった壮大な夢を実現しようと思っていたが、あの男に託したのが間違いだった。誰かを悪く思うつもりはなく、ただ自分の考えの甘さを痛感する

ばかりだ。

イ　異国の宋に憧れて、無謀な計画を立ててしまったが、巨大な船が完成した時は本当にうれしかった。あの男は船を浮かべるところまで想像していなかったのか。ただただ、あざむかれたのが悔しい。

ウ　渡宋するという計画が不可能なのは分かっていたような気がする。やはりあの男を信用してはいけなかったのだ。微かな望みを持って船の完成を楽しみにしていたが、ひと時の夢だったとあきらめよう。

エ　現実から逃避するために、異国に渡ろうとしたが、見事に失敗してしまっ巨大な船の造営に多大な費用を浪費して申し訳なく思う。今後こんな夢を見られることはもうないだろう。

問五　傍線３「乱暴な法師」の乱暴な行為が具体的に表れている箇所を二十五字以内で抜き出し「行為」に続く形で文末を直して書け。

問六　傍線４「へんな強さ」とあるが、次の中から「へんな強さ」に相当するものを二つ選び、その記号を書け。

ア　権力を振りかざす人の強さ

イ　運命に逆らおうとしない人の強さ

ウ　それとなくわざとらしさを感じさせる人の強さ

エ　悪意や嫌悪感を冗談ですませてしまう人の強さ

オ　恵まれた環境で育ち、誰からも反感を持たれない人の強さ

問七　傍線Ａ「ばかになった。」、傍線Ｂ「あれもばかな男だ。」について、誰の何を指してばかだというのか。次の説明の中からそれぞれ最も適当なものを選び、その記号を書け。

Ａ「ばかになった。」

ア　鎌倉幕府全体の、統制のゆるみと危機を指す。

イ　将軍家の、風流に拘泥して夢ばかり追っていることを指す。

ウ　将軍家の、気まぐれに振り回される家臣達の愚かさを指す。

エ　将軍家の、都への関心ばかりで現実を見ようとしないことを指す。

B「あれもばかな男だ。」

ア　陳和卿の、将軍家の希望だからといって実現不可能だとわかっていた計画に加担したことを指す。

イ　陳和卿の、実力を過信し多くの人々の夢を砕いてしまったことを指す。

ウ　陳和卿と将軍家の、だます方もだまされる方も愚かだから悲惨な結果になったことを指す。

エ　陳和卿と将軍家の、二人で夢をかなえようと悪戦苦闘したことを指す。

問八　傍線5「まだ私の気持ちがお分かりにならぬとみえる。」とあるが、この時の禅師の気持ちを説明した次の中から、最も適当なものを選び、その記号を書け。

ア　官位昇進ばかりを気にし、保身に走る卑しい京都の人に近い自分にとって卑屈さを感じないで済むところであるという気持ち

イ　他の人には分かりにくいだろうが、京都への嫌悪感と好感が入り混じった複雑な感情を持つ自分には逆に住みやすいのだという気持ち

ウ　見栄っ張りな人の住む嫌悪すべき京都を好むのは、自分は卑しい精神の持ち主であると自覚しているから、紛れ込むには快適だという気持ち

エ　無責任に遊び暮らしている風流人を嫌悪しながらも、どこかに憧れを持つ自分にとって京都は落ち着けるのだという気持ち

問九　傍線6「それこそ発狂しているみたいな気持ちになるんだ。」から出てくる禅師の言葉を二箇所抜き出し、それぞれ十五字以内で書け。

問十　全文に散見する蟹の描写は鮮やかで印象的であるが、最後三行は禅師の姿に重ねあわされている。語り手である「私」は禅師をどんな男だと思っているのか。それを説明した次の中から最も適当なものを選び、その記号を書け。

ア　蟹を無造作に捕まえ、肉をむさぼり食う姿にへきえきしながら、野生に近い醜い男

だと思っている。また、洗練されている将軍家とは違い嫌悪している京に住むのが似合っていると豪語する自虐的な男であると思っている。

イ　蟹を無慈悲に乱暴に扱い、白い肉をむさぼり食う姿を見て獣のような野蛮な男だと思っている。また、将軍家への卑屈さと憧れに似た感情を抱きながら、あさましくぶざまな生き方を貫く人格的にうす汚い男だと思っている。

ウ　暗闇の中で蟹を焼く火に照らされた獣じみた姿と白い肉に食らいつく醜い姿を見て、不気味な男だと思っている。また、食い散らした蟹の残骸に一層嫌悪感を抱き、将軍家には比べようもない乱暴で下品な男だと思っている。

エ　海辺の暗闇に灯された蟹を焼く火に浮かぶ異様な横顔には、卑しい精神が投影されていると思っている。また、将軍家への複雑な感情が食べ散らかされた残骸の醜さに象徴され、今後ますます監視が必要な男だと思っている。

問題三　次の（　　）に当てはまる語を選び、その記号を書け。

①毎日寝てばかりいるなんて（　　）した奴だ。

②（　　）不審の男が警察官に職務質問された。

③彼は太宰治に（　　）している。

④弟は（　　）して妹に算数の問題を解かせようとした。

⑤戦国時代のある暴君は失敗した家臣をしきりに（　　）した。

⑥彼は造園家として日本一の腕前だと（　　）する。

⑦敵軍は馬を前面に並べて戦力を（　　）した。

⑧彼は人助けをした美談を（　　）に説明した。

⑨彼はいつも（　　）な態度をとるので皆に嫌われている。

⑩演出家は今回もまた（　　）的な新作を発表した。

語群　ア　横柄　　イ　自負　　ウ　誇示　　エ　横着　　オ　罵倒

カ　傾倒　　キ　野心　　ク　大仰　　ケ　堕落　　コ　挙動

サ　希望　　シ　献身

問題四　次の（　　）に当てはまる適当な語を選び、その記号を書け。

①昔のことは全て（ア　水　イ　川　ウ　海）に流して、協力しよう。

②君の説明を聞いて目から（ア　まつ毛　イ　涙　ウ　鱗）が落ちた。

③瞬く間に（ア　当確　イ　統覚　ウ　頭角）を現した。

④立て板に（ア　水　イ　釘　ウ　糊）の弁舌に圧倒された。

⑤ちょうど渡りに（ア　橋　イ　水　ウ　船）の申し出があった。

⑥大安売りのチラシを見て思わず食（ア　枝　イ　志　ウ　指）を動かす。

⑦新人ながら彼の実力には皆が一（ア　日　イ　目　ウ　間）置いている。

⑧君には派手な服は似合わないと身も（ア　蓋　イ　形　ウ　頭）もなく言われた。

⑨仕事の丁寧さでは、先輩に一（ア　秋　イ　旦　ウ　日）の長がある。

⑩上手く説明することができず適当にお（ア　湯　イ　茶　ウ　水）を濁しておいた。

入学試験過去問題③　解答用紙

受験番号

氏名

得点

問題一

問一
- ①
- ⑤
- ②
- ⑥
- ③
- ④

問二

問三
- つまり
- すなわち

問四

問五

問六

問七
- A
- B

問八

問九

問十

問題二

問一
- ①
- ⑤
- ②
- ⑥
- ③
- ④

問二
- a
- b
- c

問三

問四

問五
- 行為

問六

問七
- A
- B

問八

問九

問十

問題三

①　②　③　④　⑤　⑥　⑦　⑧　⑨　⑩

問題四

①　②　③　④　⑤　⑥　⑦　⑧　⑨　⑩

入学試験過去問題　模範解答③

問題一

問一
①アイマイ
②イキョ
③就
④オチイ
⑤搬送
⑥オカ

問二
イ
ウ
（順不同）

問三
つまり
イ
すなわち
ウ

問四
矛盾

問五
エ

問六
自分の意志で自由に選択する状況になかった

問七
A
自由に、自分の意志で、能動的に選択できる状況にあった
B
責任を負わせてよいと判断

問八
ア

問九
このことは、意

問十
ア
オ
（順不同）

問題二

問一
①サイハイ
②チクデン
③度量
④ナゴ
⑤残忍
⑥薪

問二
a カ
b ク
c イ

問三
ア
イ
オ
（順不同）

問四
ウ

問五
船板にぐしゃりとたたきつけて、砂浜へほうり上げた
行為
（ほうり上げる）

問六
イ
オ
（順不同）

問七
A
エ
B
ア

問八
ウ

問九
死のうかと思っているんだ。
死んでしまうんだ。

問十
イ

問題三

①ケ
②コ
③カ
④エ
⑤オ
⑥イ
⑦ウ
⑧ク
⑨ア
⑩キ

問題四

①ア
②ウ
③ウ
④ア
⑤ウ
⑥ウ
⑦イ
⑧ア
⑨ウ
⑩イ

この模範解答は、本校のオープンキャンパスに参加した方や本校の教職員が直接対応させて戴いた方のみに配布しているものであり、郵送等での配布は一切しておりません。
許可なく複製（コピー）をとることを固く禁じます。